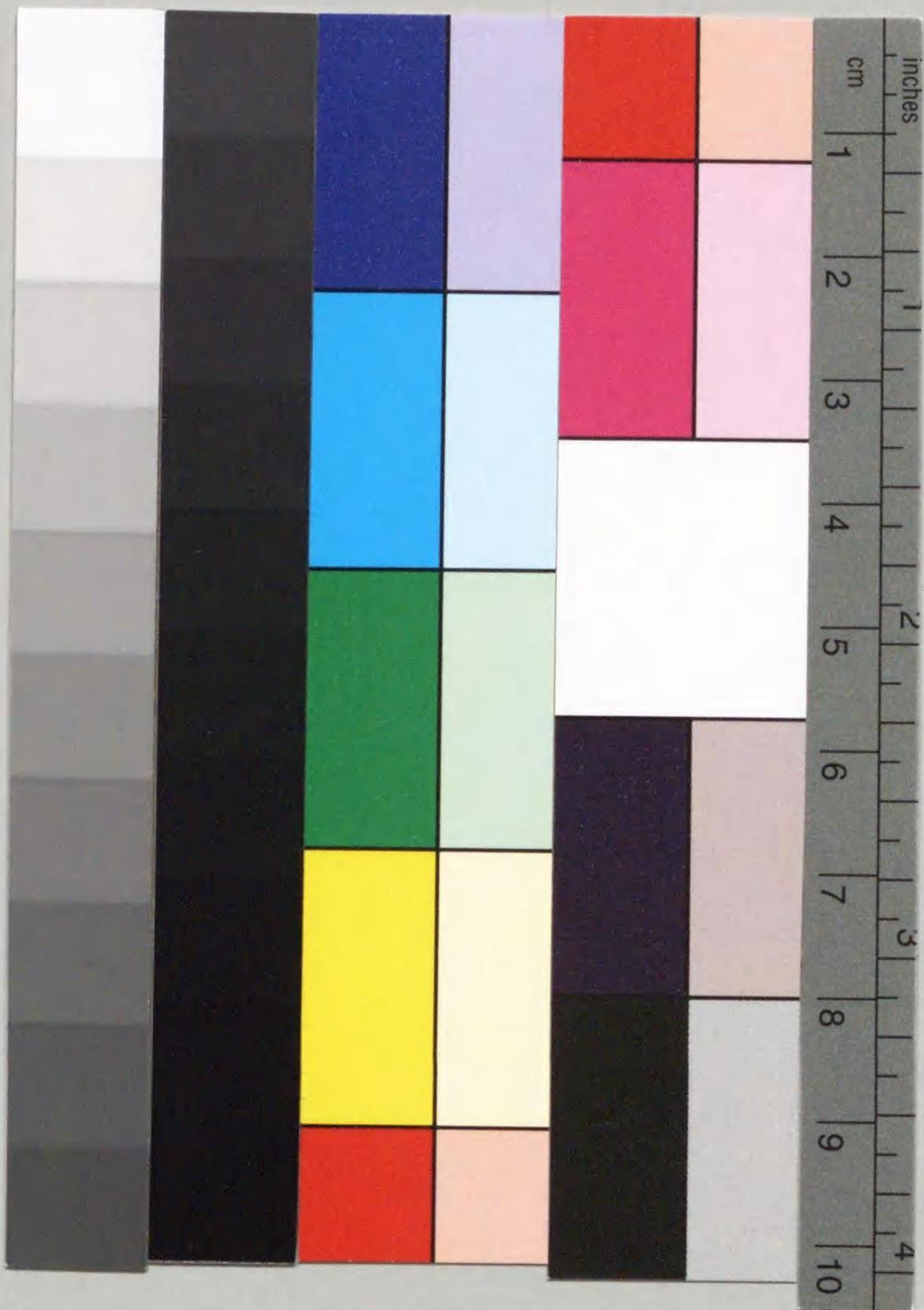
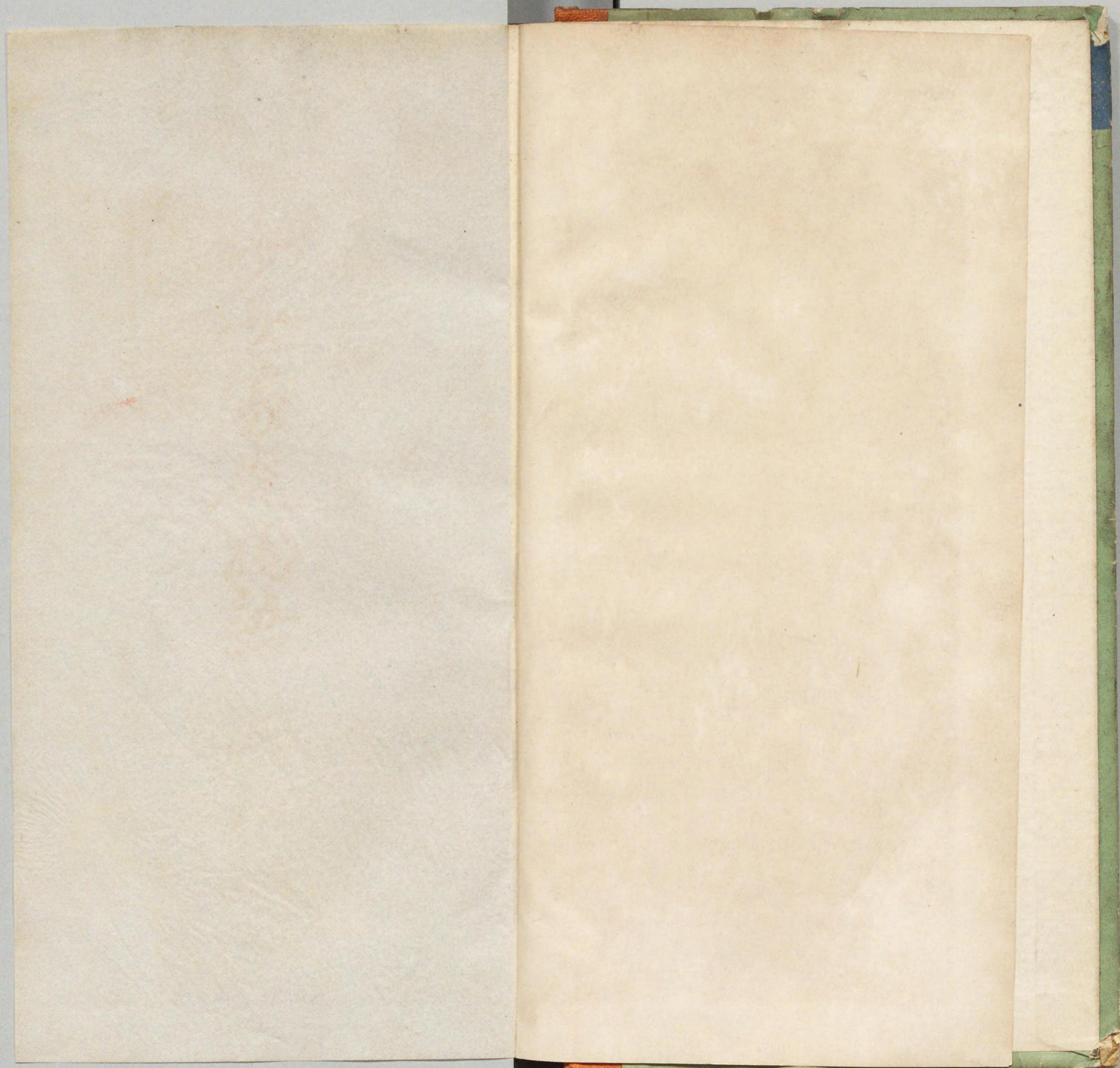


少女家庭物語



特





特52

660



少女家庭物語

笠峰
花
画著

45. 5. 2

内交

111



150019

151-9

はしがき

少女の読みものは、柔かな情操を描いたものでなければならぬ。家庭團樂の席で繰り返される物語は、材料の健全なものと、清い趣味に富んでゐるのを第一に推さねばならぬ。而してなほその上に、或る程度まで教訓の意味をも含ませたものでありたい。と私は思つて居ります。

これ等の點に専ら意を注いで、茲にこの小冊子を公にしました。もとより未熟な作品ではありますが、これを少女に讀ませて、家庭教育上、幾分の得るところがあれば、私は多大の喜びを感ずるのであります。

少女家庭物語 目次

| | |
|-------|----|
| 赤いリボン | 1 |
| 雪の日 | 10 |
| かるた會 | 19 |
| 髪 | 27 |
| 午後三時 | 37 |
| お人形 | 44 |
| お人形の名 | 51 |

またこの書は、曩に著はした『少女十二物語』の姉妹篇ともいふべきであります。即ち、彼を高等女學校程度の姉とすれば、此は小學校程度の妹で、内容も多くは家庭内のことに關し、文章もやゝ幼稚無邪氣な書き方になつて居ります。これ主として、家庭に於ける少女の讀みものたらしめようとした所以であります。

明治四十五年四月

沼田笠峰

少女家庭物語

赤いリボン

沼田 笠峰 著

『お母さん、もう御用はありませんか。』

『あゝ、これで好いよ、御苦労だつたね、さあ早くおやすみ。』

『え、まだそんなに遅かアないんでせう、私これから明日の下読みするの。』

鈴ちゃんは臺所で、お母様の手傳ひをしまつてから、ぬれた手を前掛で拭きながら、薄ぐらい灯火の前に坐りました。

さびしい田舎家のことして、あたりは何の物音もなく、次の間に寝てゐる弟の健ちゃんの鼾が、スヤ／＼と氣もちよさうに聞えるばかり。おつと本を讀んで居りますと、表では折々思ひ出したやうに、風が吹き荒びます。

晝間はお母さんの手傳ひや健ちゃんの世話で、本を讀む閑もない鈴ちゃんは、いつても夕方の御用がすんでから、おそくまで机に向ふのでした。

『鈴ちゃん、もうぢきお正月が来るよ。』

と、お母様は箆笥の上から針箱をおろしながら仰つしやいました。

『あと十五日でせう、十五日位ぢきですわねえ、健ちゃんは大喜びなのよ。』

『ほんとに、あんなに喜んでゐるんだから、早く着物を縫つてやりませうよ、ねえ。』

『好い着物を着て、帽子を買つてもらふんだつて言つてゐましたよ。』

『帽子々々つて、あんなに言つてるんだから、安いのも一つ、買つてやりたいたいだけだけれど……』

『お母さん、買つておやんなさいよ、そりやア健ちゃんは喜ぶことよ。』

『でもねえ、健坊のものばかり買ふと、お前になんにも買つてやれなくなるぢやないか。』

と、お母様はそつと鈴ちゃんの横顔を覗くやうになさいました。

『でも好いわ、私の貯金を出すから、ね。そしたら健ちゃんの帽子が買へる』

てせう。』

と、鈴ちゃんは何気なく言つてしまひました。

親子三人の貧しい生活なので、お正月が來ても、鈴ちゃんは、よそのお嬢様たちのやうに、綺麗な着物や空氣草履を買つてもらふことは出來ないのでした。それはもう鈴ちゃんは、前から自分の家の貧しいことを知つて居りますので、少しでもお金があつたら、家のためにお母様のためにと、年にも似合はずよく辨へて居りました。

けれども、學校でお友だちが皆、きれいなリボンを掛けたり、新しい袴をはいたりしてゐるのを見ると、自分の哀れな姿が悲しくなることもありました。せめてお正月には、赤いリボンをかけて見たいと、前から僅かばかり

のお金をためておきました。

リボンは欲しいけれど、健ちゃんがあんなに帽子々々と言つて居るのに、それを買つてやらないのは可哀さうだと思ひましたから、鈴ちゃんはお母様に向つて、

『あの、私の貯金で帽子を買つてやりませう、ねお母さん、そしたら健ちゃんも喜ぶわ。』

と申しました。お母様は針の手を止めて考へながら、

『そりやア健ちゃんも喜ぶけれど、そんなことしたら、お前が困るぢやないか、お前には着物も買つてやれないんだもの、せめてあの貯金で、銘仙の羽織でもと思つてゐるんだから……』

『好いのお母さん、私着物も羽織もいらないの、それにあれんばかりの貯金ぢやア、とても羽織は買へないんですもの。』
 『だから、足りない所は、どうにでもして私が買つてやらうと思つてゐるんだけれど。』

貧乏なために、可愛い娘に羽織一枚さへも買つてやれないかと思ふと、お母様は悲しくなるのでした。鈴ちゃんもお母様の心を察して、

『ほんとに私は好いのお母さん、去年の羽織があるぢやありませんか、あれを縫ひ直せば好いわ。』

『でも鈴ちゃん、お正月に古いものばかりぢやア、あんまりだねえ。』
 『だつて構はないわ、まだあの羽織はきれいなんですもの。それより健ちゃんに帽子を買つてやりませう。それから私、もしお金が餘つたら、赤いリボンを買つて頂だいな、ねえお母さん。』

斯う言つて鈴ちゃんは、譯もなく書物のページを繰りました。なんにも知らぬ健ちゃんには、相變らずスヤ／＼と鼻をたて、次の間で寝て居ります。

お母様は、健ちゃんには帽子を買つて喜ばせたいし、やさしい鈴ちゃんにも新らしい羽織を着せたいし、どうしたらよいかと迷ひながら、今の貧しさが、つくづく悲しくなるのでした。その貧しい生活を察して、鈴ちゃんがわざと何も欲しがらないかと思ふと、なほさら可哀さうになつて、

『あゝさう／＼、お前はリボンが欲しいッて言つてゐたね、買つてあげますよ。リボンも羽織も健ちゃんの帽子も、みんな買へるやうにませう、ね。』

……お正月までにお金をためて。』

『えい、お母さんの綿入もね。』

『さうく、家中のものがみんな暖かにして、お正月を迎へようね。さあ、さうと定めておいて、今夜はもう寝ませうよ、また明日早く起きなげやアならないから。』

と、あたりを片づけはじめました。

『お母さんも早くおやすみなさいな。お金のことなんか、そんなに心配しなくツても、お正月までにきつと出来ますわ、ねえお母さん。』

と、元氣らしく言つて、鈴ちゃんも立ちあがりまして、外ではまた、一しきり木枯が吹きすさびました。

それから幾日か経つて、いよ／＼大晦日の晩には、帽子もリボンもきれいなのが買へました。けれども鈴ちゃんの羽織はとう／＼出来ませんでした、鈴ちゃんは赤いリボンを掛ける嬉しさに、他のことは何も不足に思ひませんでした。

雪の日

美代ちゃんは、朝からもう遊びつかれてしまひました。部屋中一ぱいに取
り散らした玩具や繪本を、机の傍に片づけて、思ひ出したやうに縁側の障子
をあけて見ました。

『あら、まだ降つてるわ。随分つもつたこと！ あら、あの梅の枝が折れさ
うだわ、まあ綺麗ねえ。』

昨夜から降り出した雪は、お庭一面につもつて、南天の葉も石燈籠も、乙
女椿も梅の小枝も、まるで真綿の帽子を冠つたやうです。どこからか雀が二
三羽飛んで来て、垣根の木の枝にとまつたかと思ふと、ハラ／＼と粉雪がこ

ぼれ散りました。

美代ちゃんは縁側に立つて、しばらく雪景色を見てゐましたが、暗い空か
ら、雪は小止みなく降りしきりますので、

『ほんとにこんなに降つちやア、お遊びにも出られないんだもの。雀なんか
冷たかアないのか知ら？ 私、日曜だのに一日家にゐてつまらないわ。』
と、ひとり言をいつて、しぶ／＼またお部屋に入りました。

『何か面白いことをして遊びたいなア。』

斯う思つて、おつと考へこんでゐましたが、

『あ、私、好いこと考へた。さうだ、さうしませう。』

と、机の上から更紗の學校袋を取り出し、その中へ鉛筆と手帳と小さな紙函

とを入れました。それから机の抽斗をかきまはして色紙をさがし出し、それを四角に切つて、

『斯う切つて、お薬を包むんだけど……お薬には何が好いか知らず？』
と、また暫らく考へて、今度はお母様の所へ行つて、白砂糖を少し頂いて来ました。而して、四角な色紙にお砂糖を少しづつ包んだものを四ツ拵へて、さも大切さうに紙函の中へ入れました。

それから美代ちゃんは、お袴をはいて、お砂糖包みの入つた學校袋をさげて、

『これでも私お医者様なんだから、さあお祖母様の所へ行つて來よう。』
と、何だか様子ぶつて長い廊下を通り、お離れのお祖母さまのお部屋の入口

まで参りました。

『今日は……お祖母さまいらつしやいますか。』
と、わざと大人のやうな聲を出しました。

『誰だえ、そこへ來て居るのは、美代ちゃんかえ。』

『あのね、お祖母さま、お祖母さまが御病氣だつていふことですから、一寸お見舞に参りました。』

『おやく／＼さうで御座いますか、御親切にねえ。さあどうぞお這入り下さ。』

と、お祖母さまも美代ちゃんが喜ぶやうに、いつもとは違つて叮嚀に仰つしやいました。

『それでは御免下さいまし。』
と、美代ちゃんは氣取つてお部屋に這入りました。

お祖母さまは、暖かさうな絹のお蒲團のかゝつた炬燵にあたつて、眼鏡をかけて、新聞を讀んでいらつしやいましたが、美代ちゃんがあまり澄まし込んで居りますので、

『これはくゝお寒いのに、まあ御苦勞様でございましたねえ、さあどうぞ此方へ。』

と言ひながら、眼鏡をはづして、傍の座蒲團を美代ちゃんの方へお薦めになりました。

美代ちゃんは笑ひたいのを我慢して、

『お加減は如何でございますか、お腹は痛みませんか。どれ、一寸お脈を拜見いたしませう。』

と、お醫者様のなさるやうに、お祖母さまの手首をそつと握つて、脈を取る眞似をしました。お祖母さまのお手が暖かいのに、美代ちゃんは鐵のやうに冷たい手をしてゐるものですから、

『まあ、何といふ冷たい手なんだねえ。』

と、お祖母様は思はず手をお引込めになりました。

『お祖母さま、暫らくの御辛抱ですから、お手をお出しにならなければいけませんよ。さあ、もう一度拜見いたしませう。』

と、生意氣なことを言つて、美代ちゃんはお祖母さまの手首をぢつと握つて

自分の手を暖め、

『あの、一寸お舌を……』

と申しました。お祖母さまはアーンと大きな口をあけて舌をお見せになりました。その次に美代ちゃんは、學校袋の中から鉛筆を取り出し、それを驗温器の代りにして、仔細らしうお祖母さまの腋の下に挿んで見ました。

『お熱はさほどでも御座いせんが……』

と、美代ちゃんは首を傾けて、ちよつと考へるまねをして、

『少し胃がお悪いやうでございますねえ、大したことはございませんけれど……あの、只今お薬を差し上げますが、それよりもお祖母さま、私の申し上げる通りの養生をなさると宜しうございますよ。』

『ハイ、どんなことでございますか、お医者さまの仰ツしやることなら、何でも致しますから。』

『あのウ、お祖母さまは胃がお悪いから、お菓子は毒でございますよ。それで、あの茶箆筒の上にあるお菓子は、私が頂きますわ。』

『おやく、お医者様が召し上げるんですか。』

『はあ、あのお祖母さまの所に置いときますと、却つて悪うございますから、私がお毒見に頂きますの。それから、お祖母さまはお一人でお寂しいのが、病氣の原因なんですよ。それで今日は、私に何かお話をして下さると宜しうございます。』

と、笑ひながら申しました。

『變な養生でございますねえ。』

『え、これが新發明の養生法なんですわ。さつとお祖母さま癒りますよ。』

……さあお菓子頂戴！』

斯う言つて美代ちゃんは、お祖母さまと差向ひに炬燵にあたり、お菓子を喰べながら、お祖母さまから面白い昔噺を承はりました。

外では、まだ雪が静かに降つて居ります。

か る た 會

外ではカチンカチンと、羽子をつく音がのどかにきこえます。今まで繪本を見てゐた君ちゃんは、おつとしては居られないやうな氣になつて、いきなり羽子板をもつて表へ駆け出しました。

見ると、お隣りの雪ちゃんや花ちゃんが、きれいに化粧をして、さも樂しさをうに羽子をついて居りますので、君ちゃんも負けない氣になつて、

『私も入れてちやうだいな。』

と、門松の蔭から美しい顔を出しました。

『あら君ちゃん、早く入らつしやいよ、今ね、私まけてばかりゐるのよ、く』

やしいから、あなた加勢してちやうだいな。』
 と、雪ちゃんが申しました。君ちゃんは喜んで、皆と一しよに羽子をつまきはじめました。

すると、お家の中から玉姉さんが大きな聲で、

『君ちゃん、君ちゃん。』

と呼び立てます。何の御用かと思つてをりますと、

『君ちゃん、早くお支度をなさいよ、これから麴町の姉さまのお家へ行くんだから。』

麴町の姉さまと聞いて、君ちゃんはあわて、お家へ駆け込みました。

去年の春、お嫁に行らした麴町の大きい姉さまのお家で、今年のお正月

には賑やかなカルタ會があるといふので、君ちゃんは暮の中から、それはそれは樂しみにして居りました。

『もう幾つねるとお正月？』 お正月には大きい姉さまのお家へ、カルタに行くのね。』

と、まだ一月も二月も前から、君ちゃんは毎日のやうに待ち暮らしてゐたのでした。ところが、その樂しいお正月ももう五つ寝たらといふ日になつて、思ひがけなく麴町の姉さまは御病氣だといふ報知が参りました。

『まあ、どうしませう。姉さまが御病氣なら、カルタ會は出來ないかも知れないわねえ。』

と、君ちゃんは眼を圓くして、家にいらつしやる玉姉さんに尋ねました。玉

姉さんも困つたらしい顔をして、

『ほんとに困つちまふのね、姉さまが御病氣ぢやあ、とてもカルタなんかして居られないわ。』

『さうねえ、私つまらないわ。……でも、お正月までに直ると好いのね。』

『だつて、よつほどお悪いんだつて言ふことよ。』

『あら、まあどうしませう、私先からあんなに楽しみにしてゐたのに、つまらないわ。』

君ちゃんも泣き出しさうな顔をしました。

それから後、君ちゃんは毎日『大きいお姉様の病氣がなほるやうに』と、お祈りをいたしました。けれども、めでたいお正月になつても、まだ直ら

ないといふことなので、君ちゃんはもうくがつかりして、『つまらないわ、つまらないわ』と言ひつゞけてゐました。

仕方がありませんから、君ちゃんはもうカルタのことは、諦めてしまひました。

あきらめて繪本を見たり、羽子をついたりしてゐたのに、玉姉さんが麴町の姉さまのお家へ行く、と仰つしやつたものですから、君ちゃんはびつくりしてお家へ駆け込んだのです。

『玉姉さん、大きい姉さまの御病氣は、もう直つたの？』

と、君ちゃんが眼を見はつて尋ねますと、玉姉さんはすました顔で、『どうだか解らないわ。』

「あら、なぜ解らないの。これから行くんだつていふぢやありませんか。」
 「え、さうよ、行くことは行くのだけれど、病氣のことは解らないわ。まあ何でも好いから、早くお支度をなさいよ。」
 斯う言つて玉姉さんは、さつさと自分のお化粧をしていらつしやいます。君ちゃんは何だか夢を見るやうで、變に思ひましたけれど、いはれる通りにいたしました。

やがて、玉姉さんも君ちゃんも、すつかりお支度が出来ました。

『それではお母様、行つて参ります。』

と挨拶をして、美しい姉妹は立關から俥に乗りました。松竹立てた賑やかな町々を俥にゆられて、麴町のお家に着くまで、君ちゃんは姉様の病氣のこと

ばかり考へてゐました。

俥が姉さまのお家の前にとまりますと、中からはカルタの詠み聲がきこえました。『おやッ』と君ちゃんが胸をとどろかせる間もなく、

『まあ君ちゃんも玉ちゃんも、遅かつたのねえ、待つてゐましたよ。』と、姉さまがにこ／＼しながら出ていらつしやいました。

『あら姉様、御病氣は?』

と、君ちゃんはキマリわるさうに申しました。

傍で玉姉さんは、クス／＼と笑ひ出しました。

『病氣ぢやあないのよ、こんなにピン／＼してゐるぢやありませんか、オホ、、、。あれはね、君ちゃんがあんまり早く來たがるから、玉ちゃんと相

談して、一寸あゝ言つて見たのよ、御免なさい！』
『あら、ぢやあ嘘なの、あんまりだわ。玉姉さんも随分ねえ。』
『でも君ちゃん、もう来たから好いぢやアないの、ね、御免なさい！』
『だつて、私ほんとに心配したことよ、あんまりだわ。』
と、君ちゃんは甘へるやうに身體を揺りましたが、その顔には嬉しさうな色があらはれてゐました。

待ちに待つたカルタ會に来て、君ちゃんはその日おそくまで、姉さまのお傍で楽しくあそびました。

髪

『彌生ちゃん！ 彌生ちゃん！』
赤いリボンを蝶々のやうに、額の上に躍らせながら、芳ちゃんが入つて來ました。

『なアに芳ちゃん。』
『あのね、あのね、妙姉ちゃんが髪を結つたのよ。私、今そらツと見て來たの、ウフ、、、。』
と、芳ちゃんは圓い眼を尙圓くして、忍び笑ひをしながら、彌生ちゃんの顔を見上げました。

『本當？ 妙姉ちゃんか……』

『え、嘘ぢやアないわ。私ね、今繪の御本を借りようと思つて、姉ちゃんの部屋のところまで行つたの、そうしたら、ウフ、ハ、ハ、ハ。』

くすぐつたいやうな笑ひ方をして、芳ちゃんは一寸後をふりかへつて、鼻をしゃくりました。

『をかしかつたの、妙姉ちゃんてばね、向ふむいて變な顔して、鏡と睨みッこをしてるんだもの。そうしてね、頭は島田に結つてたのよ。だから私、もうをかしくなつて、何とも言はずに來ちやつたの。』

『本當なの、え？ 芳ちゃん、嘘ついちやアきかないことよ、妙姉ちゃんは先刻まで東髪に結つてたわ。』

彌生ちゃんは、容易にその言葉が信じられないので、迂散さうな眼で芳ちゃんを見ながら、

『をかしいわねえ、妙姉ちゃんが島田に結ふなんて、明後日ツてから學校が始まるのに、どうするんだらう。頭が島田で、足の方は袴に靴で行くの？』

オホ、ハ、ハ、ハ、随分妙ちきりんだ、オホ、ハ、ハ、ハ。』

と、一人で言つて、をかしさに吹き出しました。

『妙ちきりんてなアに、彌生ちゃん？』

『オホ、ハ、ハ、ハ、芳ちゃん知らないの、妙ちきりんてものは、後で教へて上げるけれど、妙姉さんは本當なの？』

と、まだ疑はしさに念を押しました。

「彌生ちゃんいやアだ、嘘なんかぢやアないわ、お部屋にゐるから、見てくれば直さに解るわ。」

「さう、本當なのね、ぢやア行つて見ようや。」

と言ひ捨て、ポカ／＼と暖かい縁づたひに、忍び足で妙姉さんのお部屋の方に行きました。芳ちゃんはポカンとつまらなさうな顔をして見送つてゐましたが、また思ひ出したやうに、ばた／＼と彌生ちゃんの後を追つて駆け出しました。

「あらッ、芳ちゃんは。」

彌生ちゃんが立ち留まつて、靜かに眼つきで制しましたけれど、そんなことには構はず、

「私も一しよに行きませうね、妙姉ちゃんを見に行くんだ。」

と、面白いものでも見物に行く氣で、芳ちゃんは大元氣。

「芳ちゃんは後でいらッしやいよ、私いやだ、そんなにあばれるから。」

「彌生ちゃんは意氣悪ねえ、私が教へて上げたんだから、行つても好いのよ。」

と、芳ちゃんは聞かずに、後からついて來ました。

長い縁を右手に廻つた妙子の部屋の前まで來ると、芳ちゃんは思ひ出して、

「ウフ、ハ、ハ。」

と、彌生ちゃんを見上げて、ひづがゆさうな顔をしました。

「いやな芳ちゃんよ、笑ふと妙姉さんに怒られるわ。」

と、たしなめながら障子をあけて、さも澄ました様子で、

『まあ妙姉ちやんが、全く大人のやうだわ。』

と感心して、艶々しい島田髷の後姿を飽かずに見守りました。

紅白の丈長を高い根元にかけて、冷めたさうに光る平打を一ツ挿した氣高

い美しさ、荒い矢緋に肩上げの深いのが、初々しい姿に見えました。

『私、いやで仕方がなかつたのに、お祖母様ッてば無理に結つて下すつたの

よ。をかしいわねえ彌生ちやん。』

慣れないためか、重たげに首を据えて、頭をかしげて、恥かしさうににっ

こりしました。

『いゝわ、大變よく似合つてよ。……けれど、急に大きくなつて、何だか少

し、オホ、、、。』

『あのね、彌生ちやんが妙ちきりんだッて言つたことよ。ねえ彌生ちやん！』

傍でおとなしくしてゐた芳ちやんが、いきなり口を出して、斯う言ひまし

た。

『あら、さうぢやアないわ、芳ちやんは随分よ。たゞね、學校に行く時、袴

をはいたらをかしいッて言つただけなんだわ。』

『好いの、明日一日結つて、あとは壊すんだから……さう言へばね、彌生ち

やんもお休みの中、桃われに結つてあげるッて、お祖母様は捜しにいらしッ

てよ。』

『あらいやだわ、やつと十四になつたばかりで、桃割なんてをかしいわ。』

『私だつて十七になつたばかりなのに、一度結ふもんだつて、島田になんぞ
 ……彌生ちゃんもお結ひなさいよ。お祖母様が結つて下さるのよ。』
 と、妙子が頻りにお仲間入りをすゝめて居る所へ、
 『あや、彌生も芳も此處かえ。』
 と、お祖母様が不意に這入つていらつしやいました。
 『彌生も妙姉さんのやうに、髪を結うて上げようと思つて、あつちを捜して
 ゐたんだよ、さあ、……こゝへ来てお坐り！ 手つひでだから。』
 何時にもなく被布の上に襷かけて、お祖母様は身がまへをなさいました。彌
 生ちゃんも斯う言はれると、否むことも出来ないのて、しぶく立ち上つて
 鏡臺の前に坐りました。

やがて前髪を大きく取つて、鬢と髻をつめた桃割れが出来上つた時、鏡に
 映つた自分の顔が、何だか見違へるやうになつたので、
 『オホ、……随分變な顔だこと、ホ、……』
 と、彌生ちゃんは獨りて笑ひ出しました。
 『彌生ちゃんも妙ちさりんだ ウフ、……』
 『やつぱりをかしいわねえ、オホ、……』
 顔を見合せて、三人が笑ひくづれました。
 『私たちがばかり つまらないわ。芳ちゃんもお稚兒かお烟草盆にてもお結
 ひなさいよ。オホ、ホ。』
 『いやアだ、私やつぱりあかつばの方が好いわ。』

『そんなこと言はないで、結つて御覽よ、お正月には日本髪にするものよ。』

と、彌生子が言ふと 妙子も眞面目な顔で、

『ほんとに芳ちゃんが幼稚に結ふと、きつと可愛く見えることよ。』

『さうよ、そしたら芳ちゃん、妙さきりんの譯がわかるわ。』

と、彌生子が笑ひながら言ひました。芳ちゃんは横を向いて、

『いやアだ、私やつぱりおかつばの方が好い。』

と、澄ました顔をしました。

午後三時

『母ちゃん！ お菓子頂戴。』

綺麗なメリンス友禪の京ちゃんの単衣を縫つていらした母様の脊中に、

もたれるやうに身をよせて、京ちゃんは横の方から母様のお顔をのぞきなが

ら、お菓子をねだりました。母様は、ちよつと針の手をやすめて、

『おや、もうお菓子ですか、少し早いやうぢやアありませんか。』

と、茶箆筒の上の時計をお見上げになりました。京ちゃんは鼻をならして、

『よう、よう母ちゃん、よう！』

と、身體をゆすつて、なか／＼き／＼ません。

『京ちゃん御覽なさい。お時計がまだ三時の所へいつてませんよ。』
と仰つしやつて、袖つけの糸を前齒でポキンと切つて、もう片一方の袖をつ
けやうとなさいました。

『三時まで？ あとたくさん待つての母ちゃん。』
と、京ちゃんは仕方なさうに、時計と母様のお顔をかはるく見えてをり
ました。

京ちゃんはお晝前の十時と、お晝からの三時とに、お菓子をいたゞくこと
にきめてありますから、ほかの時間はちつとも知りませんけれど、十時の處
と三時の處だけを、よく知つて居るのです。

房々とした切禿の頭を母様の頬にあて、脊中につかまつたま、京ちゃ

んはピョン／＼飛んでゐるので、母様はお仕事が出来ません。

『まア仕様のない京ちゃんだこと、そんなことをしてゐると、京ちゃんの着
物が縫へないぢやアありませんか。明後日叔母さまのお家へ着てゆかれませ
んよ。』

といはれたので、京ちゃんはしよげた顔をして、傍にベタリと坐つて、お時
計と睨みツこをはじめました。

京ちゃんは暫く大人しくしてゐましたが、三時になるのが待ち遠くて／＼
仕方がありません。早くあの針が三時の處へゆけばいと、おつと時計を見
つめてゐると、数字も針も一所にボンヤリして、しまひには、ちやうど大き
な朝顔が一つ咲いてゐるやうに見えます。おや／＼お時計が朝顔になつたの

か知らん、と思つてゐますと、今までチクタクと鳴つてゐた音は、花が何か歌つてゐるやうです。京ちゃんは面白くなつて、脇目もふらず大きな目を睜つて、いつまでもいつまでも見てゐました。

母様は、京ちゃんがあまり大人しくしてゐるので、

『京ちゃん、おとなしいことね。』

と、ふり返つておつしやいました。京ちゃんはびつくりして、

『あら、母ちゃん！』

『何してゐたの、あんまり静かだから、お晝寝かと思ひましたよ。』

京ちゃんの着物は肩上げから腰上げまで、すつかり出来上つてをりました。

『さア出来ましたよ。京ちゃんがおとなしかつたから、早く出来たんです』

よ、一寸着て御覽なさい。』

と、にっこりして、桃色の扱帯を解いて、後から着せて下さいました。京ち

ゃんは白地と柴舟と菊のついた元祿袖の着物よりも、時計の方が氣にかゝつ

て仕方がありません。母様がこちらに向けて、ゆきから丈を見やうとなさつ

ても、後ばかり向いてしまひました。

『どうしたの京ちゃんは、ちやんとこつちを向いていらつしやいな。』

と仰つしやると、

『だつてお時計が、……あの朝顔が歌をうたつてゐるの。』

母様はふきだして、

『京ちゃんは今まで居眠りしてゐたんでせう、寢ぼけちやアいけませんよ、』

「さア、こつちのお手を上げて……」
と、しきりにくらべて見ていらつしやいます。

色白で星のやうに輝く瞳、蕾のやうな口元、母様は抱きしめたいほど可愛
い様子の京ちゃんに、今出来上がった着物を着せてやつて、よく似合ふこと、
とニコニコしながら眺めていらつしやいました。時計は、今しも音たかくチ
ン／＼／＼と三時をうちました。京ちゃんは嬉しさにはね上がつて、

『三時よ、母ちゃん！』

と力を入れて言ひました。而してホツと小さくため息をして、

『あゝ、やつとお時計があんよしたの。』

とにつこり。母様は笑ひながら、

『さア、京ちゃんはそんなに待つてゐたの？ さアさア上げますよ。けふは
京ちゃんが一番好きなものをね。』

と、戸棚から大きな美しい桃を出して下さいました。京ちゃんはおいしさう
に桃を喰べながら、時計を見ましたが、もうそれは朝顔にも何にも見えませ
んでした。

お
人
形

「美代ちゃん。美代ちゃんは居ないのかえ？」

と、お母様がお呼びになりますので、日當りの好いお縁側で編み物をしてゐた美代ちゃんは、

「なあに、母様。」

と立ち上つて、茶の間の方へ駆け出しました。

「美代ちゃん、をば様が入らしたんだよ。」

「まあ！ をば様が……あ、嬉しいッ。」

と、美代ちゃんは勢ひよく茶の間の障子を開けて、そこに坐るが早いのか、

「をば様入らッしやい、今日は……」と、お辭儀をしました。

「へえ今日は。……おや、美代ちゃんは編み物をしてゐたんだね、大層きれいなものぢやありませんか、何を編んでるの？」

「これ？ これはね、肱つきなの、むづかしいんですよ。そいでね、私今一生懸命に編んでゐたものだから、をば様が入らしたの知らずにゐましたわ。ほんとに母様も、もつと早く知らして下されば好いのに。」

「だつてね美代ちゃん、今日はもう美代ちゃんに會はずに、だまつて歸らうと思つてゐたの、をば様は美代ちゃんに憎まれてゐるから。」

と、をば様が笑ひながら仰ッしやるので、美代ちゃんは眠を圓くして、
「あら厭だ、をば様を憎んだりなんかしやしないわ、私、もう入らッしやる

時分だらうと思つて、待つてゐたのよ。それに黙つて歸るなんて、そんなことしたら私承知しないことよ。』

『おゝ、恐い〜！ 美代ちゃんが承知しないと云つたら、どんなことになるだらうねえ。』

『どんなことツて、そりやア私……』

と言ひかけて、美代ちゃんが少し考へる様子をして居りますと、傍からお母様が、

『美代ちゃんをば様とは仲がわるいのね、いつでも一緒に寄ると、喧嘩がはじまるんだよ。そんなに喧嘩ばかりするなら、をば様が好いものを持つて来て下すつたんだけれど、美代ちゃんには上げられないか知ら？』

『さうねえ、美代ちゃんは欲しくないんでせうよ。』

と、をば様も母様の加勢をして、口をお添へになりました。

さう云はれると美代ちゃんは、母様の傍においてある大きなボール箱に目をつけて、

『何を戴いたの、えゝ母様。それ私に下すつたんでせう。』

と言つて、今度はをば様の方に向つて、

『をば様、もう仲よくしませうね。喧嘩なんかしないわねえ。』

と、『ねえ』に力を入れて申しました。をば様は、その様子のをかしさを怵へて、

『ホ、、、、美代ちゃんは現金なのねえ、ボール箱のお蔭で仲なほりをする

んだね。』

『さうぢやアないのよ、をば様。』

『まあ何でも好いから、美代ちゃん、あの箱の中に何かがあるか、あて、御覽なさいよ。』

と仰ツしやるので、美代ちゃんは箱の方に摺り寄つて、

『何てせう？ お蜜柑ぢやアないわねえ、蜜柑箱なら木で拵へてあるから……え、と、あのね、あのう簪か知ら？』

『さあ如何でせうねえ、簪にしちやア箱が大きくはないの。』

『さうね、箱が大きいわ。』

と、美代ちゃんは箱を両手で提げて見て、

『さう重くもないのね、靴かも知れないわ。さうでせう母様、當つたでせう。』

『どうですか、私にも解りませんよ。』

と、母様はわざと知らぬ顔をしていらツしやるものですから、美代ちゃんはなほさら早く見たくてたまりません。

『よう母様、そんなこと言はないで、早く教へて頂戴な。……ねえ、靴でせう、きつと靴だわ。』

『ぢやアね美代ちゃん、開けて見て、もし違つてゐたら上げませんよ。』

と、をば様が仰ツしやるので、
 『厭よ、そんなことツてないわ。私、早く見たいから、をば様、見せて頂戴な、後生！』

美代ちゃんみよは拜む真似まねをして、ボール箱ぼとををば様さまのお膝下ひざもとに持つて行きま
した。

『それぢやア開あけませうかねえ。』

と、をば様さまが紐ひもの結び目めを解といて、蓋ふたをお開あけになりますと、中なかには水色みづいろの
洋服やうふくを着きた可愛かあいらしいお人形にんぎやうが寝ねてゐました。髪かみの色けが金色きんいろで、眼めがパツチ
リとして、さくら色いろの頬ほのふくらんだ、今いまにも口くちを開あけてにつこりと笑わらひさ
うな顔かほつき、美代ちゃんみよは、

『まあ可愛かあいい！』 と叫さけんで、いきなり抱だき上げました。

お人形にんぎやうの名な

をば様さまから可愛かあいらしいお人形にんぎやうを頂いたいた美代ちゃんみよは、嬉うれしくて嬉うれしくて、そ
の晩ばんは抱だいて見みたり寝ねかして見みたりして、いつまでも眠ねむられない位くらゐでした。

『美代ちゃんみよ、もう好いい加減かげんにお寝ねなさいよ、そんなに遅おそくまで遊あそんでゐる
と、明あした日起おきされませんよ、お人形にんぎやうも眠ねむいつて。』

と、お母様かあさまに言いはれても、美代ちゃんみよはまだお人形にんぎやうを離はなしませんでした。そ
れてその晩ばんは、お人形にんぎやうをちやあんと枕元まくらもとにおいて寝ねました。

翌あくる朝あさ、眼めがさめるが早はやいか、美代ちゃんみよはお人形にんぎやうを見せるために、お
隣となりの玉ちゃんたまを呼よんで來きました。

「ね、玉ちゃん、これなのよ、可愛いでせう。」
 「え、可愛いね、西洋のお人形だわねえ。それ泣かないこと？」
 と、玉ちゃんが羨ましさを顔をして申しました。

「泣かないのよ。」

「さう、泣くのもあるわねえ。」

「これね玉ちゃん、泣きはしないけれど、寝かすと眼をつぶるの。」

「まあ本當？ 面白いわねえ、寝かして御覽なさいな。」

「寝かして見ませうか。……ホラ、ね、眼をつぶつたてせう。」

美代ちゃんがお人形を横にすると、両方の臉が靜かに動いて、涼しさうな眼はかくれてしまひました。

「あら、ほんとに眠つてしまつたわ、可愛いねえ。ちやア今度は私に貸して御覽なさい、私が寝かしても好いでせう。」

と、玉ちゃんが大切さうに抱き上げますと、お人形はバツチリと眼を開きました。そしてまた靜かに寝かされると、前のやうに臉を閉ぢますので、玉ちゃんはさもなく感じたやうに眺めながら、

「こんなに眠るお人形は、私はじめてよ。西洋のお人形だからだわねえ。」

「え、可愛いでせう、私大好き！」

「ほんとに可愛いわ。名は何ていふの？」
 と尋ねました。

すると美代ちゃんは、一寸首を傾けて、

「名前……まだ名はつけないのよ、昨日頂いたばかりなんですもの。姉さんにつけて頂かうと思つて居るのよ。でも、何ていふ名が好いでせう？」

「可愛い名をつけると好いわ。」

「ぢやア玉ちゃん、考へてちやうだいな。あなた、お人形の名をつけたことあつて？」

「あるわ、私のお人形は花ちゃんツて言ふのよ。」

「花ちゃん、好い名ねえ。私のもそんな名が欲しいわ。」

「そいぢやアねえ美代ちゃん、えいと……」

と、玉ちゃんはぢつとお人形を見つめて考へてから、

「えいと、あのうね、このお人形は色が白いから、雪ちゃんとしたら如何？」

「雪ちゃんは可愛いわねえ。でも昨日お母様が、これは桜色だつて仰ツしやつてよ。」

「さうね、頬のところは桜色だわ。そいぢやアさくら……桜ちゃんは？」

「桜ちゃんツて、何だか言ひにくいわ。」

と、美代ちゃんは笑ひ出しました。玉ちゃんもにつこり笑つて、美代ちゃんの方を見ながら、

「何だか變ね。」

「何としたら好いでせう。」

二人は暫らく考へてから、今度は美代ちゃんが、

「私、好い名を考へたことよ。あのネ、もうちゃんは止して、櫻子とするの。」

『あ、それが好いわ。西洋のお人形ですもの、ハイカラで好いことよ。』
『ぢやア櫻子としませうか。』

『えい、櫻子……でも何だか變ぢアないの、やつぱり言ひにくいわ。』

『櫻子、櫻子……何だかクラ子クラ子と言つてるやうね。』

『だから、もつと他の名を考へませうよ、ね。やさしい名で可愛いのを。』
と、また二人はだまつて考へ込みました。そして桃子だの、すみれ子だの、さよちゃん、光ちゃん、としちゃんなどい、いろ／＼つけて見ましたけれど、どうしてもまだ氣に入らないので、

『ほんとに好い名ツてないものね。姉さんに聞いて見ませうか。』

『えい、それが好いことよ。』

『姉さんのお部屋へ行きませう、ね。』

と、美代ちゃんはお人形を抱いて、玉ちゃんと一しよにお姉様のお部屋へ参りました。

『姉さん、このお人形に名をつけて頂戴な。』

と言ひますと、机に對つていらしたお姉様は、クルリと此方を向いて、

『あら美代ちゃん、もうお人形を抱いてるの、今朝はおとなしいと思つたら、さつきから玉ちゃんと遊んでゐたのね。』

と仰ツしやるので、美代ちゃんは

『今ね姉さん、お人形の名を考へてゐたの。でも好い名がつかないから、姉さんつけて頂戴な、よう姉さん。』

と、傍へ寄りました。すると姉さんは、

『名をつけるの、何が好いでせうね。さうだ、あのね美代ちゃん、これは西洋のお人形だから、リリーさんが好いわ。』

『リリーさんてなあに？』

『オホ、、、美代ちゃんはまだ知らないわね、リリーつて英語よ。英語で百合つて言ふことなのよ。』

『あら好いわ、私、百合ちゃんつていふ名好きよ。』

『さう、おやア百合ちゃんでも好いわ、同じことだから。』

『そいぢやア姉さん、英語は忘れると困るから、私百合ちゃんにしますわ。そいで好いわねえ玉ちゃん。』

『え、百合ちゃんつてほんとに可愛いわ。』

『好いわねえ。』

と、美代ちゃんは嬉しさに大きな聲で言ひました。

この時から、お人形の名は『百合ちゃん』ときまりました。

車上の少女

(上)

お京ちゃんは弟や妹が多いので、いつでも忙しい思ひをして居ります。
 弟の健ちゃんが尋常五年、妹の玉ちゃんはまだ明けて八歳になつたばかりで、
 學校へは行つて居りますけれど、時々お母さんに甘へるといふ有様。まだそ
 の下に、五歳になつたのと三歳の弟とが二人もあるので、朝晩は随分賑やか
 です。それに、お父様が去年の秋亡くなつたものですから、かよわいお母さ
 んの手一ツで、これだけの子供を育て、行かねばならないのです。

お京ちゃんと健ちゃんとは、それでもいくらかお母様の手助けになります
 けれど、下の小さい二人は、お母様の忙しさなどはちつとも知らずに、兄弟喧
 嘩をしたり、甘ッたれたり、家中をバタバタ駆けまはつたり、亂暴なことを
 して仕方がありません。

『ほんとにお前たちは騒々しいねえ、そんなに皆が一度にやかましく言つた
 つて、何が何だか解らないぢやないか。お母様はもう逆上してしまひさうだ
 よ。……これお京や、氣の毒だけれど、御飯の間だけ武坊を負ぶつておくれ
 な。』

斯う言つてお母様は、いつでも忙しい時には、一番末の武坊をお京ちゃん
 に負ぶらせようとなさいます。



お京ちゃんきやうちゃんは素直すなはな性質なちですから、

『はい、お母様かあさま、私が負おぶることよ、ほんとに騒々さわしいのねえ。……さあ武坊たけぼくや、お出いて？』

と、手てを後うしろへ廻まはして、脊中せなかを向むけて見みせます。すると武坊たけぼくも、いつものことなので、おとなしくお京ちゃんきやうちゃんに負おぶさつて、

『表おもへ、表おもへ……お馬うまが通とほる、ねえ姉ねえちゃん。』

と、まはらぬ口くちで斯かう言いひながら、嬉うれしさうに脊中せなかで手足てあしをバタ／＼動うごかせます。

斯かうしてお京ちゃんきやうちゃんは、毎朝まいあさ、學校がっこうへ行く前まへに武坊たけぼくを負おぶつて、近所きんじよの静しづかな町まちをあるきながら、本ほんを讀よむこともあるし、編物あみものをすることもありまし

た。

すると毎朝、ちやうど同じ時刻に、きつとその町を俥で通る美しい少女が
あります。ゑび茶のマントを着て、白い襟巻をして、お下げに赤いリボンを
つけた少女、おほかた何處かの女學校へ通ふのでせう、年はお京ちやんより
一ツか二ツは上かも知れません。俥の上ですから、身體の格好はよく解りま
せんけれど、色の白い、眠もとのやさしい少女を、お京ちやんは武坊を負ぶ
つたまゝ、なつかしげに見送ることが度々ありました。

『どこのお嬢様だらう？ きつと學習院へいらつしやるんだわ。』

さう思つてお京ちやんは、馳せ行く俥が彼方の町の角を曲るまで見送りな
がら、

「私もこの四月から女學校へ上りたいけれど。……お父様がないんだのに、お母様があんなに忙しがつていらつしやるんだから、駄目かも知れないわ。ほんとに両親の揃つてある方が羨ましい。」
と、心の中で思つて、われ知らず涙を流すこともありました。

(下)

よく晴れた日曜日の朝、お母様の臺所の御用が片づいてから、お京ちゃん
は久しぶりで、お父様のお墓参りに出かけました。
お父様のお墓は青山にあるのです。お京ちゃんは片手に梅の枝とお線香と
を持つて、霜解けの道を青山へと急ぎました。

「ほんとにお父様が生きてゐて下さると好いんだけれど。」
お京ちゃんはお墓に行く途すがら、お父様のことばかり思ひ出してゐま
した。電車道を横ぎつて、赤い煉瓦の兵營を右に見て、五ツ目の細い通りを
左に曲ると、その一番奥のところがお父様のお墓なのです。
新しい塔婆の前に立つて、持つて来たお花とお線香とを供へて、恭しく
両掌を合せますと、お京ちゃんは悲しくて悲しくてたまりませんでした。
「お父様、お父様……」
と、心の中で呼んで見て、また丁寧に頭を下げました。やがてその前を離れ
て、静かに歸りかけますと、ふと、傍の鐵の垣のしてあるお墓から、
「さあお嬢様、もうお泣き遊ばさないで、……遅くなりますから歸りませ

う、ねえお嬢様。』

といふ聲が聞えました。お京ちゃんは立ち留まつて、垣根越しに廣いお墓の中を覗きました。見れば、えび茶のマントを着て、白い襟卷をした美しい少女が、お供の女中の袖に絶るやうにして、お墓の前で泣いてゐるのでした。

『あらッ！ あの何時も俵でお通りになるお嬢様ぢやアないか知ら？』
と、お京ちゃんは思はず胸を躍らせました。ちやうどその時、お墓の少女も顔を上げて、涙の眼で此方を見つめました。

『あらッ！』

『やつぱりさうだ、あのお嬢様だ。』

お京ちゃんはすぐに頭を下げて、丁寧にお辭儀をしました。するとその少

女も、なつかしさうにお辭儀をしかへしました。お供の女中は、兩方を見比べながら、

『さあお嬢様、もうお歸り遊ばせ。』

と、手を引いて外へ出ました。

お京ちゃんは、その少女の顔だけは、これまでによく見知つて居りますので、思ひがけない所で出遇つても、親しさうに寄り添うてあるきました。而してお供の女中から、その少女が或る華族のお嬢様であるといふことを聞きました。

『でも私、お母様がないんですもの、ほんとに寂しいのよ。お母様はあのお墓の中にいらつしやるの。』

と言つて、少女はまた名残惜しさうにお墓の方を振りかへつて見ました。
『お嬢様はお母様がいらつしやらないし、私はお父様がないんですよ。親の
ないものは不幸ですわね。』

と、お京ちゃんは、そつと涙を拭きました。
母のない少女と、父のない少女とが連れ立つてあるく青山墓地には、さび
しい薄日が射して、名も知らぬ小鳥が囀つてゐました。

をば様

雙六にも飽き、家族合せもつまらなくなつた三人は、前髪を下げたお下髪
の浪子がいひ出したお客様ごつこについて、相談をはじめました。

『ちやア私が叔母様になるの？』

『え、さうよ、いけなくつて？』

『光子さんは母様の聲色が上手だから、いゝてせう。それで登美ちゃんは
嬢様になるの、ね、それならいゝてせう。』

『私が叔母様？ なんだかキマリがわるいわねえ、ホ、ホ、ホ。』

『好いぢやアありませんか、まあなつて御覽なすよ。』

『而したら、貴女は何になるの。』

『私はねえ、家の母様になるの、而して叔母様が登美ちゃんのお嬢様を連れ

て、お客様に入らつしやるんだわ、ね、やつて見ませうよ、さ、いいこと。』

と、浪子は朝から遊びに来て居る従妹の光子と、妹の登美ちゃんを相手に、

これからお母様の役を勤めて見るといふのです。

お縁側の明るい障子に鳥影がさして、どこかて風の唸りが聞える。松の内

はすぎても、さすがに長閑な春の氣もちが漂うて居ります。

『ぢやア私の家は此處よ、そつちのお庭の方から入つていらつしやいな。一

寸こゝを片づけて、お蒲團を並べて置くわ。』

繪本やら、雑誌やら、蜜柑の皮やらを手早く取り片づけて、お座敷から持

つて来た座蒲團を二つ並べました。その中に庭に廻つた二人が、

『もうよくつて、ぢやア行きますよ。……御免下さいまし。』

と、急に大人びた聲づくりて音づれました。

『はい、入らつしやいまし、おや、お珍らしいこと！ さアどうぞお上り下

さい、まアお嬢様も御一所ですか、まアどうぞ。』

と、これもおすましな物言ひで、浪子が出て来ました。

『では御免下さいまし、さア登美子や！』

と、光子の叔母様が先に立つて、登美子の手を引いて座敷に入りました。

『明けましてお目出度うございます。昨年中はいろくとお世話様になりま
して、どうぞまた何分よろしくお願ひ申します。登美子さんも大そう大きく

お成りでございますこと。』

『いつも御無沙汰ばかりいたして、すみませんでございます。御年始にも早くに上らうと存じましたが、つい忙しうございましたので……それに登美子も連れて伺ひたいと思ひましたので、おそくなりました。皆様御機嫌よろしうございますか?』

『はい、有難うございます、お蔭様で皆丈夫でございます、今日は生憎浪子がお友だちの處へ参りましたので、留守なんでございますよ。』

いつもお母様のなさる癖の、お膝の上で揉手をしながら、おつぼ口をして浪子が申しますと、光子の方もすつかり叔母様になりすまして、

『おや、浪子さんはお留守でいらつしやいますか、登美子もお目にかゝりた

いと申して居りましたのに、いつ頃お歸りていらつしやいます。』

『今日は何ですか、少し遅くなるやうなことを申して居りました。あれも學校の方が忙しいので、遊ぶひまもない位でございますよ、登美子さんも御勉強でいらつしやいませう。』

と、極く眞面目なもので、すつかりお母様の通りに挨拶をして居ります。

『オア失禮な、まだお茶もさし上げませんで……ちよつと御免下さい。』

と、光子の叔母様も違つた咳ばらひをエヘン。そこへ浪子がお茶を持って出て來ました

『どうもなか／＼お寒うございますこと。登美子さん、大變今日は大人しく

ッていらつしやいますね、私どもの浪子などは、お轉婆で困りますんでございますよ。』

『いゝえ、どういたしまして、私どものもやつぱり騒ぎやなんてございますよ。』

『そりやアあんまり大人しいのもいけませんねえ、少しは騒ぐ方が、反つて宜しうございます。』

と、なか／＼開けたお母様です。

光子の叔母様は、

『ちよつと便所を拜借させて頂きます。』

と、ぽか／＼と暖かいお縁の方へ出てゆく。登美子もさつさから足の痛い

を我慢して、おつと坐つて居たので、

『お母様、私も参りますよ。』

と、後について廊下の方へ出ました。浪子はこの閑に御馳走の仕度をするつもりで、次の間の方へお菓子や蜜柑を取りに立ちました。

『おやく、誰も居ないんだねえ。あの子たちはどこへ行つたんだらう。お客様でも入らしたと見えて、ちやんとお茶まで出てゐること。』

と、光子のお母様で、二人には叔母に當る、眼鏡をかけた本當の叔母様が這入つていらつしやいました。而して光子の今まで坐つて居た座蒲團を引きよせて、火鉢の前に坐りました。

そこへ浪子は、片手に菓子器を、片手に蜜柑を盛つた皿を持つて、行儀正

しくうつむき勝ちに入つて來ました。

『どうも失禮いたしました。つまりませんものですが、召し上つて下さいましな、これは今朝ほど代々木から叔母が持つて参りましたもので、おいしくはございますまいけれど……。』

と、二つの品をすゝめる。叔母様は浪子がわざと悪戯をするのだと思つて、『はい／＼、どうも御馳走様。』

と、これも眞面目に挨拶をしました。浪子は夢中になつて、ちつとも心づかず、なほも氣取つた聲で、

『どうもね貴女、代々木の叔母もようございますが、口喧ましくつて、頑固で、舊式な人なんでございますよ、やつぱり開けない人は困りますね、家へ

参りましてまで小言をいふので、私どもは蔭で「堅パン」と申して居る位なんでございますよ。あれでも困りますのねえ。ちつとは騒ぐ方が、よつほどよろしうございますわ。』

と、饒舌り立てながら、手まめに火鉢の炭を直したり、お菓子をとりわけたりして居ります。

光子と登美ちゃんとは、お座敷へ入らうとして、ガラス越しに本物の叔母様がいらつしやることに氣がつかましたので、そつと横の方に隠れて居りました。

それとも知らない浪子は、主人ぶりにお菓子をすゝめて、

『まあどうぞ召し上つて見て下さいまし、今に浪子も歸りませうと存じます

から、ねえ貴女。』

と、ひよいと顔を上げますと、これはまた思ひがけもないこと、本當の叔母様がさちんと坐つて、むつかしい顔をしていらつしやいました。浪子は驚くまいことか、

『あら、あの……あの……貴女は叔母様で……あらッ。』

と、顔を眞赤にして次の室へ飛び出しました。

『オホホ、、、オホ、、、ホ、、、。』

『アハ、、、オホ、、、アハ、、、アハハ。』

ドツと堪へ切れない笑ひ聲が、お縁の方で起りました。今までそツと覗き見をしてゐた二人が、苦いお顔の叔母様の御様子や、浪子の頓狂な顔が可笑

しかつたので、お腹を抱へてころげるやうに笑ひ出してしまつたのでした。

『おや、そこにも誰か居たのかえ?』

と、をば様はあたりをお見廻しになりました。それを聞いて浪子は恨めしそ
うな眼をして、

『ひどいわ、ひどいわ、光子さんが叔母様で、叔母様が光子さん、あら、さ
うぢやアないわ、私どうしませう、叔母様だつたんですもの。』

と、まだどきまぎと譯の解らぬことをいつて、よくく困つたらしい顔をし
ました。その様子があんまりをかしいので、

『浪子さん オホ、、、。』

『アハ、、、オホ、、、。』

と、また一緒に失笑しました。
 すると障子の中からも、堰かれたゐて水が一時に流れるやうに、
 『オホ、、、、オホ、、、、。』
 これは叔母様のお聲でした。

星 と 花

例へば、一人は何時も變らぬ光りを放つて、夜毎にみ空高くかゞやく星の
 やう、とても言ひませうか。一人は置く霜白い籬にたゞ一輪匂ふ白菊の花と
 すれば、ふさはしいてせうか。それは霞女子高等小學校の一年生上野みち子
 と、櫻川とし子との二人でございます。

みち子はどちらかと言へば少し痩せぎすで、顔は下ぶくれの白色で、その
 口許にはいつもほく笑みを湛へたやうに、優しさが溢れて居ります。

『上野さんは、いつでも嬉しそうなお顔していらッしやるのねえ。』
 と、同級のお友だちから言はれる位、やさしい氣だてがその美しい面にまで

現はれてゐました。それで學課の方も尋常一年の時から優等ばかり、いつの學期にも、四十幾人の同級生中、みち子の上に出るものは一人もありませんでした。

それになか／＼の勉強家で、どの學課でも飽かずにとめるといふ風でし
たから、書き方と圖書とが割合に不出來なだけで、その他は算術でも、暗記
ものでも、國語でも、唱歌でも、優等でないものはありません。それで居て
お友だちから、

『まア、みち子さんはどうしてそんなによくお出來なさるの。』

『今度もきまつて貴女が一番よ、お嬉しいてせう。』
など、聞かれました。ちつとも誇るやうな氣色はなく、反つて、

『そんなこたアないわ、私出來ないんですもの。たゞね、一生懸命に勉強す
るだけなのよ、誰だつて少しよけいに勉強すれば出來ることなんですわ。』
と、眞面目に思つてゐる通りを包まず答へて、お友だちに勉強をすゝめるの
でした。

それですから中には、みち子のよく出來るのを羨やむ餘り、心の中で憎ん
だり嫉んだりするものも二三人はありました。大抵は上野さん、みち子さ
んと、級中で大騒ぎをされるのでした。受持ちの先生もまた大層みち子をお
褒めになつてゐました。けれども或る日、國語の書取の時間に、みち子ばか
りが一字も間違ひなく出來ましたのを見て、先生は
『上野さんは生れつきよくお出來になります。子供の時にいくらよく出來

ても、大きくなつてから、その割合に進まないことがありますし、また自分の學力を誇るやうなことがあつては、決してのち／＼に立派なよい婦人となることは出来ませんから、怠らず勉強して、優しい美しい心がけを持つてゐなければなりません。』

と、よくお諭しになつたことがありました。

みち子はもとより柔順な性質で、その上誰にでも親切で、誇りがましい様子などは少しもありませんし、身體も丈夫で、いつもにこ／＼してゐる位ですから、この後、小學校を出て女學校へ入つても、幼い時に變らず、ますますその美しい心の光りを現はし、やがては、み空の星のそのやうに、多くの人から譽めた、へられることとせう。

櫻川とし子も、みち子と同じ級の生徒で、これはこの春三月、他の小學校から轉校して來たのです。初めはあまり目立ちもせず、どちらかといへば、おとなしすぎるほど黙つた、めつたに笑顔も見せないほどでしたから、お友だちもあまり出来ませんでした。

入學の初めに、とし子のお父さんは、わざ／＼受持の先生に遇つて、

『どうも平素から呑み込みのよくない方の性質で、只今までの學校でも、他人様が一度で覺えられることも、二度も三度も教へて頂かなければ解らないといふ風でございましたから、どうぞ何分よろしく願ひいたします。』
と、頼んで行かれた位で、とし子自身でもそのことはよく心得て、ひたすら

熱心に勉強をして居りました。

『今度お入りになつた櫻川さんて、すこし變つた方ねえ、私たちが遊んで居るときでも、指で數をかぞへたり、口の中でブツ／＼獨り言をいつていらしつてよ。』

と、一人が不審がつて言へば、すぐに他の生徒も

『そうよ、全く妙ね、ホラ、今もあの大きな木の下で指を折つてらつしやるでせう、いつでも算術のあつた次の時間には、さつと何か勘定していらつしやるのねえ。』

『ホ、をかしいわねえ、あの様子つたらないわ、あんなにしても、ちつともお出来にならないのねえ。』

とし子は斯うして、皆に笑はれるほど熱心に勉強して居りました。それでも餘りよく出来ないで、反つてお友だちの好い笑物にされて、

『櫻川さん、貴女のやうに勉強なされば、今度は上野さんを追ひこして、さつと一番になれるでせうよ、ホ、ホ、。』

と、冷かし半分に、からかはれるのでした。

けれども、とし子は別に怒つたやうな様子もなく、少し顔を赤らめて下を向いたまゝ、黙つて居るのでした。

ところが一學期もすみ、二學期の終りには、全級の生徒が眼を見張つて驚いたことが出来ました。それは、いつも出来ないといつて輕蔑されてゐたとし子が、實に立派な成績を現はしたことです。國語、算術、地理歴史とも、

みんな優等で、その他の學課もそれ／＼好い成績でしたので、今まであんなに馬鹿にしてゐた同級生の驚きは、一通りではありませんでした。先生も大層おほめになりました。

『今度の櫻川さんの「成績は感心でした。これ全く「熱心こそ成功の基なれ」といふ生きた訓へです。どうぞ皆さんもとして子さんのやうに、撓まず熱心に勉強して下さい。』

と、感心していらつしやいました。

それでも謙遜ぶかいとし子は、別に高慢な顔もせず、相變らず何の時間にも膝に手をのせて、先生のお話を一語も残すまいと、熱心に聞いて居ります。その様子の氣高いこと、つくらず飾らず、すべての苦しさをしのいで咲

き出でた白菊一輪！ 今ではみち子につゞいて、クラス中の人望を身にあつめるやうになりました。

天には星、地には花。……二人はそれにも譬へられる立派な婦人となることとせう。

遠足

さよちやんは、まだ學校へ行つては居りません。けれども、姉さんや兄さんたちの學校で、遠足があつたり修學旅行があつたりするのを聞くと、羨ましくてたまりませんでした。

明日は遠足だと言つて、姉さんが信玄袋を出して騒いでいらつしやると、さよちやんはその傍へ寄つて来て、

『遠足つて姉さん、お辨當もつてお遊びに行くこととせう。』
と申しました。姉さんは笑ひながら、

『ホ、、、さよちやんはよく知つてるわねえ、さよちやんはお辨當たべる

こと好きでせう、一しよに連れてつてあげませうか。』
と仰つしやいました。すると、さよちやんは大よろこびで、
『え、姉さん連れてつて頂だいな。私母さんにさう言つて来るわ、きつとよ。』

『でも、さよちやんは歩けないでせう。』

『歩けることよ。私、日比谷公園に行つたことがあるわ。』
と言ふので、姉さんはからかひ半分に、

『日比谷公園？ あゝそら、何時か行つたわねえ、あの時、歸りに足が痛いつて泣いたぢやありませんか、そいでとら、電車に乗つたのね。』

『嘘よ、嘘よ、泣きやアしないわ、姉さんは知らないのよ。兄さんで行つた

時、ちつとも草臥れなかつたわ。だから、明日連れてつて頂だいよ、ね。私、母さんにさう言ふわ。』

と、眞顔になつてゐますので、姉さんは困つてしまひました。

『でもね、さよちやん、明日は學校の方みんなで遠い所へ行くんだから、駄目よ。さよちやんは歩けやしないわ。』

『歩くことよ姉さん、遠くても構はないの、連れてつて頂だいよ、よう、よう。』

と、ねだつて仕方がありません。それでも姉さんは、さよちやんを連れて行くことは出来ないの、どうかして止めさせようと、いろ／＼にして賺しました。すると、さよちやんは

『ぢやア私、お人形と遠足するから好いわ。』

と言つて、お人形の置いてある隣りの部屋へ行きました。

姉さんは、明日のお支度が忙しいので、着物を揃へたり、靴を磨いたりして、さよちやんのこととは忘れてしまひました。

翌くる朝、姉さんは早く起きて、いそ／＼と遠足に出かけました。

あとで、さよちやんはお母様にねだつて、可愛らしいお辨當をこしらへて頂きました。

『さよちやん、お辨當が出来ましたよ、これで好いでせう、ね。而してこれは竹やに持たせるんでせう。』

と、お母様は女中の竹やをつけて、日比谷公園へても遊びにやるつもりで、

斯う仰つしやいました。さよちやんは眼を圓くして、

『あら母さん、私、お人形と遠足するのよ、竹やなんぞ厭だわ。』

『あや、お人形と行くのかえ、一體どこへ遠足するの？』

『お庭で遠足するのよう。』

と言ふので、母様に何のことだと言はぬばかりに、

『オホ、、、お庭で遠足、お人形と……まあさうかえ、ぢやア遠足の飯

事だね。』

『だつて母さん、お庭でも遠足出来るてせう。』

『え、く、出来ますとも、お庭の遠足なら、いつでも歸れるから一番好いん

ですよ、ね、お辨當を持つて、好いことねえ。』

と、母様はもう安心して、竹やをつけることもお止めになりました。

『母さん、あの姉さんのお人形も連れてツてやりませうね。』

と、さよちやんはお辨當を腰につけ、二ツの人形を抱へて、さも本當の遠足を
するやうな心もちでお庭へ出ました。

ひなげしの咲いた花壇を通つて、青葉しげれる木の下道をぬけ、見はらし
の好い築山に上つた時には、さよちやんはもうよほど疲れてゐました。そこ
で暫らく休んで、お辨當をあけました。

『さ、お前もおあがり！ ね、お腹がすいたてせう。喰べさせてあげよう
ね。』

と言ひながら、二ツのお人形に代るく御飯をたべさせました。

『お行儀が悪いのねえ。そんなにこぼすんぢやないよ。あらく、顔に一ぱい御飯がついたわ。』

獨言をいつて、可愛らしいお人形の御飯だらけの顔を撫てまはしました。

『あら、こんなに穢なくなつたわ、汗かいてゐたの？ え、暑かつたのかえ、随分遠足したから、暑かつたわねえ。』

と、お人形よりも自分が暑いので、御飯粒のついた掌で、いきなり額の汗を拭きました。

『あら、私の顔も御飯だらけよ、あゝ暑い、困つてしまつたわ、どうしたら好いでせう。』

と、あたりを見廻してゐましたが、やがて築山の麓の泉水に思ひついて、

『あゝさうだ、こんなに穢ない顔になつたから、彼所で洗つてやらう。今日は暑いんだもの、水を浴びせると好いわ。』

斯う言つて築山を下り、二ツのお人形の顔を泉水で洗ひました、洗へば洗ふほど、お人形の顔は皮がむけて穢なくなるので、さよちやんは譯もわからず、泣きながらお家へ歸つて來ました。

女中の竹やは、この始末を見て、

『あらまアお嬢さん！』

と、吃驚しました。

お母様はさよちやんの顔とお人形とを見比べながら、
『大變な遠足だねえ。』

と、お笑ひになりました。
その晩、遠足から歸つて來た姉さんは、自分の可愛いお人形をメチャク
にされたので、

『あら、こんなにしてしまつて、私厭だわ。さよちゃんは随分ねえ。』
と恨みました。

その後さよちゃんは、もう遠足をしようとは言はなくなりました。

お姉さん

一

毎日細い雨が降りつゞいて、外へ遊びに出ることも出来ないし、お隣りの
さいちやんも遊びに來ない時、京ちゃんはお母様のお傍で、今まで何度も見
あきた御本をひろげて見たり、お座布團をまるめて、自分の着物を着せてお
んぶしたりして遊ぶのですが、それもぢき厭になつて、

『お母ちゃん、赤ちゃんがねんねしたから、もうとつて頂戴』
と、今、お母様の赤い下じめを解いて負ぶせて頂いて、そこらを寝んねんよ

う／＼つて身體を揺つてゐたのに、すぐ面倒になつたので、そこへ抛りだしてしまひました。而して今度は、お母様の針箱からそつと鋏を出して、赤い巾をチヨキチヨキ切りはじめたり、針刺から針をとつて縫ふ眞似をしたりしました。すると、

『あぶないから、京ちゃんおよしなさいね。さ、こつちへ頂戴、お手にでも刺したら大變ですよ。この巾ととりかへませうね、さア針を頂戴。』

折角内所で針を持つたと思つたら、すぐお母様に叱られました。京ちゃんは、一寸こつて泣いて見ようかと思つて、べそをつくつたら、お母様がきれいな友禪の巾を出して下さつたので、泣くのはやめて素直に出しました。

『京ちゃんはお伶俐ね、よくいふことを聞いたから、姉様を拵へて上げませうね。さうしてこれを着せておやんなさい、いゝでせう。』

と、お母様はにっこりして京ちゃんを御覽になりました。京ちゃんも嬉しくて、にっこりしました。而してこれからいつでもよくいふことを聞きませうと思ひました。お母様は半紙を出して小さく切つておさげの人形を拵へて、お顔まで書いて下さいました。そのお顔は、誰か見たことのある、京ちゃんのお好きな人に似てゐるやうだ、と思つて見てゐました。

『もう出来ましたよ、お下げにリボンをかけてやりませうね、これは京ちゃんとお揃ひの帯ですよ、ね、ごらんなさい、きれいに出来たでせう。』

さつき京ちゃんの切りこまざいた赤い巾が、リボンになりました。紫友禪の着物に白い襟をかさねて、帯は絞りの京ちゃんとお揃ひ、何てお上手に出

来たんだらうと、にこ／＼して見てをりました。

『お母ちゃん、ありがたう、京ちゃんのすきなお嬢ちゃんね。』

と、両手に大事さうに抱へて、おつと見てをります。お母様は、

『いゝてせう、それを持つておとなしく遊んでいらつしやいよ、さ、これも貸して上げますから。』

と、文庫の蓋も貸して下さいました。京ちゃんはお人形を文庫の中に寝かして、小さい布團をもつて来てかけてやりました。そして、自分もそのそばへ可愛い手をまげて、いつもお母様のなさるやうに手枕をして、一所に寝ました。暫くおつととしてゐましたが、急にお人形に好い名をつけたくなつて、

『お母ちゃん、お人形さんのお名をつけて頂戴。』

と、赤ちゃんにお乳を呑ませる時のやうに、片腕ついて起きあがりました。

『さうですね、何としたらいゝてせう、この前のおんなじやうに、よつちやんではいけませんか。』

『よつちやん、よつちやんて名、私大すぎ……よつちやんお眼さめたの、起ツきさして上げますよ。』

老成た口吻でお人形のよつちやんを起して、抱いたり、坐らせたりして遊んでゐました。

京ちゃんは一人でお母様になつたり、お友達になつたり、また赤ちゃんになつたりして、面白さうに饒舌つてゐますのを、お母様は後をふりかへつて、にこ／＼して見ていらつしやいました。やがてそれも少し飽きたらしく、京

ちゃんほんやりしてゐましたが、ふと立ち上がつて、お茶の間の方へ駆けだしてゆきました。

二

茶の間には往來に向つて、京ちゃんの首が出る位の低い窓がありますので、遊びあきた時や、相手がなくなつたらまらない時は、いつでも此室から外を眺めて居るのです。今も外へは出られないし、御菓子をいただくにはまだ時間が早いので、表を通る物賣りや、いろ／＼の人の通るのを見やうと思つてゐるのでした。

今日は雨がふつて、往來は泥の海のやうになつてゐるので、通る人も少な

く、時々幌をかけた俵や、煮豆やがチリン／＼と鐘をならして通るか、豆腐やがラツバを吹いてゆく位なもの。いつものやうに美しいお嬢様や、可愛いしい京ちゃん位な兒は、ちつとも見えません。京ちゃんは外をながめて、つまらなさうな顔をしてゐました。

すると、向ふの横町から、大きな聲で歌をうたつてゐるのが聞えたので、京ちゃんは大急ぎで首をのばして見ましたら、何處かの小僧さんが包みを背負つて、大きな字の書いてある傘をくる／＼廻しながら來るのでした。その後からは、いつもの大好きなお姉さんが、コートを着て、何かきれいなお花を持つて來るのが、京ちゃんの眼に止まりました。

『アツ、お姉ちゃん、お姉ちゃん！』

と、さも嬉しうにのび上つて見ました。

その少女は、お花のお稽古にいつた歸りらしく、菊の花を片手に、片手には紺蛇の目を持つて、足もとを見い／＼あるいてゐました。大きく前髪をとつて桃割に結つた十六七の美しい人、毎日メリンス友禪の包みをかへて、京ちゃんのお家の前を通るのです。京ちゃんはそのお姉さんが大好きで、お母様に、

『私にも、あゝいふお姉ちゃんを生んで頂戴よ。』

と、いく度困らしたか知れない位、すきなく／＼お姉さんが、淋しく物たりなく思つてゐる處へ見えただので、京ちゃんは大よろこびです。一度お姉ちゃんと呼んで見たいと思つてゐるのですが、恥かしくてまだ呼ぶことも出来ない

のです。

京ちゃんはなつかしうに、おつと見てゐますと、お姉さんはこちらの角へ曲らうとして、チラとこちらを向きました。さうして京ちゃんのまん圓な眼を見てにっこり笑ひましたので、京ちゃんは嬉しうに、あわてゝ一つおじぎをしました。その途たんに、窓の敷居にコツンと額をぶつつけました。京ちゃんは痛かつたので、顔をしかめましたけれど、お姉さんの方を見ますと、氣の毒さうな顔をして立ち止まつて見ていらつしやるので、泣くことも出来ず、思ひきつて笑ひました。お姉さんもお笑ひになつて、またそろ／＼歩いていらつしやいます。

『あゝ、もうお姉ちゃんはいつて仕まつよ。』

と、残り惜しさうに見送つてをりましたら、お隣の塀の處でまたこつちを向いて、おじぎをなさいました。さうしてだん／＼遠くなつて、蛇の目の傘は雨の中に見えなくなつて仕舞ひました。

『とう／＼お姉ちゃんが見えなくなつた。』

と、京ちゃんはがつかりして、悄悄とお母様のお傍へもどりました。さつさ拵へて頂いたお人形は、文庫の中にくろがつてをりましたが、その顔は、さつさ見た大好きなお姉さんによく似てをりました。

『あのお姉ちゃんは、さつとよつちやんてお名なんだよ。』

と、京ちゃんは一人でお姉さんのお名をさう考へました。

仲なほり

『馬鹿！ 馬鹿！』

桃ちゃんが縁側で飯事をしてゐると、いきなり大きな聲で斯う呼びたてるものがありますので、びつくりして、

『あら、いやだわ。』

と、玩具の庖丁をもつたまゝ、桃ちゃんはクル／＼した眼で、方々見廻しました。

『馬鹿！』

桃ちゃんは聲のした方をふりむいて見ました。

『オヤ／＼あの鳥だよ、こつちをむいて人のことを馬鹿だなんて。』
昨日兄さまが、桃ちゃんのために買つていらした鸚鵡は、お縁のさきの丸い籠につるされて、真面目な顔をして、ちつとこつちを見てゐました。
『馬鹿ッ！』と、今度は桃ちゃんの方で怖い顔をしながら、かういつてしかりました。

『馬鹿、馬鹿。』

羽をバタ／＼させて、つゞけざまに桃ちゃんの方を見て、大きな聲をはりあげて叫びます。

『お前こそ馬鹿だわ、私なんにもおいたをしやしないのに。』

かういつて恨めしさうに見てゐる桃ちゃんに、鸚鵡は平氣な顔で、

『馬鹿、馬鹿、馬鹿。』

と、つゞけざまに沿ひせかけますので、癩癩もちの桃ちゃんは、もう我慢がしきれなくなつて、わあツと泣きながら、手に持つてゐた庖丁やら、そこらの玩具を手あたりまかせにほうりだしました。そして足をバタ／＼させて、傍に寝かしてあつたお人形も庭へころがしてしまひました。

『桃ちゃん、どうしたの、何が氣にいらなくて、そんなに泣くの、え、え、どうしたの？』

お茶の間で桃ちゃんの着物を縫つていらした母様は、桃ちゃんの泣き聲に驚いて飛んでいらつしやいました。

『えーんえん、私、私、ばア……ばかだつて、えーんえん。』

と、桃ちゃんは大きな聲でなきながら、母様にいひますけれど、母様にはちつともその譯がわかりませんから、

『なアに、もつと確りおつしやい。ちつともわかりませんよ。』

母様はどういふわけて桃ちゃんが泣くのかわからないので、困つていらつしやいます。

『馬鹿!』

籠の中では鸚鵡が嬉しさに、あつちこつちに飛び廻つては、思ひだしたやうに一聲たかく叫びました。桃ちゃんはまた、

『えーんえん、えーんえん。』

と、一層大きな聲で泣き立てるので、母様はもう手のつけやうもなく、

『まアをかきな桃ちゃんね、そんなに泣くから鸚鵡が笑つて、馬鹿だつていふぢやありませんか、さアもうだまつてお遊びなさい。』

母様のお膝の上に突伏して身體を揺りながらまだ泣いてゐた桃ちゃんは、

『あれ、あれが私のこと馬鹿つていふの。』

と、顔を上げて鸚鵡の方を指さして、やつこのことで母様にいひつけました。

『オホ、、、、桃ちゃんはそれで泣いたの、あれは桃ちゃんのことをいふのぢやありませんよ、人のいふことを真似していふだけですから、をしへてやれば何でもいふ鳥なんですよ。それぢやア、桃ちゃんにあやまつたら堪忍するでせう、母様があやまらして上げませう。』

泣きじやくりしてゐる桃ちゃんを抱き上げて、鸚鵡の籠の傍に立つて、

『ごめん、ごめん！』

母様がいく度もくおつしやるのを、泊り木にゐてじつと聞いてゐた鸚鵡は、いきなり『ごめん』と、まだ慣れない妙な節で、鸚鵡がいひました。

『ね、あやまつたてせう、だから堪忍しておやんなさい。此鳥は何でも人の真似をするから面白いのですよ。これからお友達にしておやりなさい。』

斯う母様が仰ツしやるので、今まで怒つてゐた桃ちゃんも、少しさまりが悪くなつて、すつかり機嫌を直しました。

『ごめん！』と桃ちゃんが言ふと、鸚鵡も『ごめん！』と言ひました。

桃ちゃんはまた涙の乾かない目で母様を見上げて、につこり笑ひました。

お化粧粧

絹ちゃんは、朝から隣りの喜代ちゃんと、まゝ事をして居りましたが、二人とも遊びつかれたので、

『つまらないから、私もう止すの。』

『ぢやア、私だつて止すわ。』

斯う言つて、喜代ちゃんはさつさと歸つてしまひました。後で絹ちゃんは、玩具の庖丁や茶碗やお人形を片づけて、姉様のお部屋へ参りました。

『姉さん、お話して頂だいな。』

と言ふと、姉さまは



『お話……お話はね、歸つてからにしませう。』

『あら、姉さん何處へいらつしやるの？』

『今ね、お琴のお稽古に行くの。』

と言つて、鏡臺の前にお坐りになりました。絹ちゃんは困ッたらしい顔をして、姉さまの傍に坐りました。

姉さまは絹ちゃんには構はず、鏡とにらみツくらをして、頭髪を撫でつけたり、大きなリボンを結んだり、水おしろいをつけたりしていらつしやいます。ちつと見てゐた絹ちゃんは、思ひ出したやうに、

『姉さん、私にも白粉つけて頂だいな。』
と申しました。

「絹きぬちゃんなんか、つけるもんぢやアありませんよ。そんなおしやれしなくつても好いいわ。』

「だつて私あたし、今いま、あの喜代きよちゃんと飯事めしごとして、奥様おくさまになつてゐたんですもの。』

「だから白粉おしろいつけようツていふの？」

「え、さうよ。奥様おくさまツて白粉おしろいつけてるものでせう。』

「いやな絹きぬちゃん、子供こどもの癖くせに白粉おしろいなんかつけて、をかしいぢやアありませんか。』

「子供こどもぢやアないわ、奥様おくさまなのよ。』

「オホ、、、、、まゝごとの奥様おくさまが白粉おしろいなんかつけると、なほをかしいわ。』

姉ねえさまは笑わらひながら、さつさと自分じぶんの支度したくをして、

『絹ちゃん、歸ッてからお話してあげるから、大人しくしてらッしやいよ。』
 と言つて、お出かけになりました。

『早くね姉さん、きつとよ。』

と、絹ちゃんは姉様の後姿を見送りました。

あとで一人になると、絹ちゃんは寂しくて仕方ありません。今まで姉様が
 がしていらしたやうに、鏡臺の前にツクンと坐り込みました。而して、頭髪
 を撫でつけようとしたが、まだ毛が短かいので、いくら撫で、も、恰好
 よくはなりません。

『駄目だわ、これぢやア……髪が結へないんだもの。』

と、絹ちゃんは獨言をいつて、今度は姉様の大切にしていらッしやる御園白

粉の瓶を取り出しました。

『これが白粉だわ、これをつけると好いのよ。』

と、瓶を横にして、ドロ／＼と掌にこぼし、額から頬から鼻の尖まで、一
 面に塗りつけました。

『まあ！ 綺麗になつたこと、眞白よ。』

と、鏡に顔をうつして大喜び。それから小町紅の猪口を出して、指の尖で撫
 てまはして見て、さも大人がお化粧をするやうに、頬と唇とに紅く色をつけ
 ました。

『あら、どうしませう、つけすぎちやツた、こんなに赤くなつて。酔つぱら
 ひのやうだわ。』

絹ちゃんはおつと鏡を見てゐましたが、あんまり紅をつけ過ぎたので、またその上に白粉を塗り直しました。それから、ヘリオトロップの香水を頭や着物につけて、部屋中をブン／＼匂はせました。

『もう好いわ、これで好いのよ。』

と、すつかりお化粧を済まして、姉様の机の前に坐りました。

開け放した縁側からは、絶えず涼しい風が吹き入るし、軒につるした風鈴は、チリン／＼と鳴つて居ります。絹ちゃんは机にもたれて、うつとりとお庭を眺めてゐましたが、あんまり好い氣もちなので、何時とはなく、すやすやと居ねむりをはじめました。

その中に、姉様はお稽古から歸つて、この有様を見て、

『まあ、どうしたんだらう、いやな絹ちゃんだ。白粉も香水もメチャ／＼にしてしまつて……』と、怒りながら、

『絹ちゃん、絹ちゃん、絹ちゃアーン！』

と呼び立てました。驚いて眼をさました絹ちゃんは、まだ夢でも見てゐるやうな顔つきで、

『どうしたの、姉さん。』

『どうしたんぢやありません、この白粉を御覽なさい、悪戯ばかりして……』

『だつて私、奥様になつてるのよ。』

と、唾さうな眼で姉様を見つめました。その無邪氣な様子に、姉様は怒ることも出来なくなりました。

おけいこ

朝顔の花も蔓の末の方に小さく咲くやうになりました。秋海棠も白粉の花も、だん／＼数が少なくなつて來ました。そのかはり、萩だの桔梗だの女郎花だのが、今度は私達の番だと云はぬばかりに咲きほこつてをります。お月様もこの頃はまんまるくなつて、お使の白露が毎晩、どの花にも葉にも、小さい芝草にも、一面息を吹きかけにまゐります。さうすると、蟋蟀だのスイッチョだのが、嬉しさに聲を張り上げて歌ひ出します。これですつかり秋の神様の世界になつてしまひました。

朝からカン／＼照りつけられて、油汗がじと／＼するほど暑かつた夏は、いつの間にか逃げてしまひましたので、木や草ばかりでなく、人々も今までなまけてゐた身體をシヤンとさせて、それ／＼の仕事に一生懸命精をだすやうになりました。

お隣りのきいちやんも、暑いうちは、お琴のおけいこをお休みにしてゐましたが、この頃からまた、縮緬の小ぎれて拵へた這ひ／＼人形の袋に、白い小さい琴づめを入れて、おけいこにゆくやうになりました。歸つてくるとすぐ、『コロリンシヤン、松たアかアさい——』と、大きな聲でおさらひをはじめます。

京ちゃんは、お母さんが

『日にやけて毒だから、お家にはいつていらつしやいよ。』

と仰つしやつても、水いたづらばかりして、お池の金魚を棒で搔きまはしたり、手洗鉢の水で赤い花や青い葉をひたして絞つて見たりして、着物を汚してゐましたが、さいちゃんがコロリンシャンをはじめると、何もかもそこへほうり出してすぐ飛んでいつて、兩腕を出して袖が脊中で結んであるまゝ、チンと坐りこんで真面目な顔をして、ちつと聞いてゐるのです。

『ウフ、、、いやな京ちゃんだ、アハ、、、。』

さいちゃんは、京ちゃんが目を圓くして、兩手で膝を押へるやうについてすましてゐる顔を見ると、をかしくつて堪らなくなつて失笑だしてしまふのです。

『アハ、、、、ほんとにをかしかつたわ。そんなに大きな眼をしなくつたつ

ていゝわ、。。。さうしてどうしたの、その手は？』

京ちゃんは大きな眼をなほ大きくして、不審さうに笑ひこけてゐるさいちゃんを見てゐましたが、氣がついて自分の手を見ると眞赤。

『これ？ 朝顔の花をしぼつたの、さうしてね、赤いおつゆをこさへたんだわ。』

『京ちゃんてば、さつきの顔つたらなかつたわ、私が一生懸命に歌つてたら、人の顔ばかり見て、うんと力んだ赤い顔して、眼ばかりくるく／＼させるんですもの、もうをかしくつて／＼我慢が出来なくなつちやつたわ、あ／＼／＼今思つてもをかしいわ。もうあんな眼しちやアいやよ。』

と、いはれて京ちゃんもをかしくなつたと見えて、にっこり笑ひながら、

『えい、もう見やしないから、あとで私にも弾かしてね、えいさいちゃん！』
 『えい、あんな顔しなければ、ちよつと位ひかして上げるから、まつてらつ
 しゃい。』

今度は京ちゃん一生懸命、下ばかりむいておとなしくしてゐました。さい
 ちゃんはさつきのつゞきの處からひきはじめて、

『君イばアーン、ざアいいと、いのゝるう、なアリイ……』
 て、おしまひになりました。

『さ、いゝことよ。京ちゃん少し。』
 と云はれたので、京ちゃんはさいちゃんが退いたあとへ坐りこんで、ポツン
 くちひと小さい指ゆびでならして、さいちゃんのやうに一寸口ちよつとくちをまげて、

『うゝらの柿の木めをだして……』

と、自分勝手な歌にふしをつけて歌ひだしたので、傍そばにゐたさいちゃんは、
 また吹ふきだしてしまひました。

『アハ、、、、オホ、、、、京ちゃん、オホ、、、、』
 『あらッ、ホ、、、、。』

『ホ、、、、あんな、ホ、、、、あんなこといつて、まアをかしい！』
 と、さいちゃんは片手かたてでお腹なかをおさへながら、さも堪たまらなさうに笑わらつて、

『あゝ、あんまり笑わらつて涙なみだが出でちやつたわ、京ちゃんの様子やうすつたらないんで
 すもの……』

と、まだ笑わらひきれないといふやうに、をかしがつてゐます。京ちゃんは少し

不平で、

『もう歌はない。』

あんまり笑はれて、さまりも悪いので、いきなり傍にあつた物尺でお琴の上をガチャ／＼掻き廻しました。

『あら、京ちゃん、そんな非道いことをしちやいやよ、京ちゃんおよしなさいつてば……そんなことするなら、もう貸して上げない。』

と、京ちゃんのもつてゐる物尺をとり上げて、その上さつさとお琴の柱をはづして仕舞ひました。

京ちゃんは泣き出しさうな顔をして、恨めしげにさいちゃんを見てゐましたが、そのまゝふいと大きな庭下駄を引きずり／＼歸つてゆきました。

『京ちゃんどうしたの、またお隣りでおいたでもしてたんでせう？』

お夕飯の仕度に忙しいお臺所へ首を出した京ちゃんは、お母さんが襷掛けでお煮物をしていらつしやる後から、ヒョイと抱きついて、

『母ちゃん、お琴買って頂戴よう、さいちゃんが貸してくれないんだもの、よう母ちゃん、ようお琴をよ。』

『何ですね、急にそんなこといつたつて、仕様がないうちやアありませんか、もつと大きくなつたら買つて上げますよ。ね、だから早く大きくおなりなさい、さいちゃんのやうに。』

『いやよく、今ほしいのよ、いろんなものをひいて遊ぶんだから、ね母ちゃん、よう、よう。』

お母さんのたすきにつかまつて、しきりにせがみますので、
『それぢやア、後にお父さんに伺つてね、いゝつて仰つしやつたら、買つて
上げますよ。』

と、よんどころなしにお母さんも承知して下さいました。

京ちゃんは大喜びで家中とび廻つて、早くお父さんがお歸りになればいゝ
と、日の暮れるのをまつてゐました。

夕御飯の時、お母さんからお父さんにお話して下さつたので、京ちゃんは
やう／＼お琴を買つて頂くことになりました。

『來年から學校にゆくやうになるんだから、まだ早いけれど、遊び半分にお
けいこにやつて見ませう。』

と、お母さんが仰つしやいました。而して、赤い友禪の小切れて、きいちや
んのやうな可愛い爪入を縫つて下さいました。もうぢきに白い櫻の花びらの
やうな爪が、その中にいれられるでせう。

京ちゃんのおけいこ振りを見たいものです。

光ちゃん

光ちゃんはお人形を抱いたまゝ、泣き顔をして歸つて來ましたが、鬨をま
たげるとから、兩の眼に一ぱい涙を浮べて、

『姉ちゃん、……姉ちゃん。』

と呼んで、お人形を上り口に投げ出しました。

次のお座敷で針仕事をしてゐた姉の喜代子は、光ちゃんの聲を聞きつけて、

『光ちゃんかえ？ もう歸つて來たの、早いやうね。』

と言ひながら出て來ました。

光ちゃんは姉さんの顔を見ると、今までこらへてゐた悲しさが、一時にせ

き上げたやうに、ワツと大聲をあげて泣き伏しました。

『まあ、光ちゃん泣いてるの、どうしたのよ、えゝ？ お人形が笑つてるぢ
やないの。』

と言つても、光ちゃんは泣くばかりで、顔を上げません。

喜代子は親切に抱き起して、

『どうしたのよ光ちゃん？ そんなに泣くと顔がばつちになりますよ。ね、

泣かずにいらつしやい。今に姉ちゃんが好いもの上げるからね。……光ちや
んはお菓子が好いでせう。』

と言ふと、光ちゃんは漸く涙の顔を上げて、

『姉ちゃん、あの……』

と言ひかけて、また堪らなさに泣き入りました。

『あら、また泣くの光ちゃん。どうしたのよう。途中で轉んだの？ え、さうでもないの。……ぢやア誰かにいぢめられたんだね、え、そんなに泣かずと言つて御覽なさいよ。』

斯う言つて賺しながら、喜代子は光ちゃんを次のお座敷へ連れて行つて、好きなお菓子を一ツ握らせました。光ちゃんはまだ泣きが止まらないので、涙にうるんだ眼で、ぢつと喜代子の顔を見つめて居りましたが、

『姉ちゃん、母さんは何時歸るの。』
と尋ねました。

喜代子は胸に針でも刺されたやうに、ちよつと眼の色をかへて、

『母さんかえ？ 母さんはね、もうぢき歸つてらつしやるてせうよ、ね、光ちゃんがお人形と、おとなしく遊んで居る間に歸るつて。』

『ぢやア明日？』

『え、明日とは限らないけれど……』
と、喜代子は言ひ紛らして、熱い涙を浮べました。

『あのね姉ちゃん、光ちゃんはね、これから母さんと活動へ行くんだつて。だからもう私とは遊んでくれないの。そいでね、私をいぢめるんだもの。』

『お隣りの光ちゃんが？……光ちゃんをいぢめたのかえ、ほんとに厭な光ちゃんだねえ。』

『え、そいでね、光ちゃんは母さんと活動へ行くけれど、光ちゃんには母

さんがないから駄目だつて、さう言ふのよ。嘘だわねえ姉ちゃん、母さんは歸つて来るわねえ。』

と、光ちゃんは眼を見張つて、喜代子の顔を覗き込みました。

喜代子は涙を見つけれぬやうにと、わざと顔をそむけましたけれど、なんにも知らぬ光ちゃんが、亡き母を戀しがる心根のいぢらしさに、答へる言葉もありませんでした。

光ちゃんは姉の喜代子が横を向いて居るので、心配さうに傍へ寄つて、

『姉ちゃん、どうしたの？』

と尋ねますので、喜代子はそつと涙を拭いて、

『今ね、母さんの歸つてらつしやる日を考へてゐたの。花ちゃんが活動へい

らつしやるなら、光ちゃんも姉ちゃんが連れてつてあげませうね。だからもう花ちゃんに何か言はれても、泣くんぢやありませんよ。好い兒だからね。』

『私もう泣きやアしないわ。……でも母さんが早く歸つて来ないと、私寂しいわ。姉ちゃん、お墓ツて遠い所なんだわねえ。』

と、無邪氣に言ひますので、喜代子は堪りかねて、また熱い涙をホロ／＼と流しました。

いつまで待つてもとこしへに歸らぬ母が、墓場の奥から今にも歸つて来るやうに思つて、待ちこがれてゐる光ちゃんに、本當のことを言つて失望させるのも可哀さうだし、そのまゝ知らさずに慰めておくのも哀れだし、喜代子は身も心も置き所がないやうに、いきなり光ちゃんを引き寄せて、

『光ちゃん！ 母さんはね、今に歸つてらッしやるからね。』
と、頬ずりしました。

光ちゃんは嬉しさに、にっこりと笑みを浮べて、

『姉ちゃん、私も泣かないことよ。母さんが褒めて下さるわねえ。』

その罪のない様子に、喜代子は胸が一ぱいになりましたが、ちつと光ちゃんを抱きしめて、

『ほんとに光ちゃんは好い兒ねえ。今に母さんが、どつさりお土産を買つて来て下さるから、おとなにして遊ぶですよ、ね。……さ、お人形を負ふせてあげませう。』

と言ふと、光ちゃんは何もかも忘れたやうに、先に投げだしたお人形を抱き

上げて来て、

『姉ちゃん、お人形も寂しかつたでせうね、私がお人形の母さんになつてやるわ。』

と、言ひ／＼小さな背に負ぶつて、ねんねんようと身を揺りながら、やがて戸外へ出て行きました。

喜代子はその無邪氣な、いぢらしい様子を見るに見かねて、光ちゃんが出て行つた後は、誰に憚るところもなく、聲の限りに泣いて泣いて、泣きくづれました。

その泣き聲は、墓場の下の母さんの耳にまでひびいたかも知れません。

琴

夕美子は床の間から琴を取り出して、その前に座りました。

きれいなメリンズ友禪の被ひを静かに取り去つて、眞白な象牙の柱を一ツかけて行きますと、久しく弾かないので絃はゆるんで居ります、けれどもさすがに夕美子の心はなつかしい思ひにそゝられました。

『ほんとにながの間弾かないもんだから、こんなにゆるんでしまつて、これでも音が出るか知ら?』

と、獨り言をいひながら、調子を合せて見ました。

珍らしい琴の音を聞きつけて、お母様もにこやかに茶の間から出ていらつ

しやいました。

『夕美さん、今日はどうしたの、珍らしいぢやないか。何か弾て見るのかえ?』

『あらお母様、弾くんぢやアないんですけれど……』

と、夕美子の美しい顔は、急に曇りました。

『随分ながい間弾かなかつたねえ、もう絃がゆるんでるでせう。』

『え、あんまり打ちやつておいたものですから、駄目ですわ。』

と、俯向いたまゝ、無意味に絃の上を搔きまはしました。

八歳の春から夕美子の手に搔き鳴らされた十三絃も、お父様が病氣におかかり遊ばしてから、誰の手に觸れることもなく、ただ床の間に飾られてありました。

夕美子は、寂しい時にも楽しい時にも、この琴を友として日を送つてゐましたのに、お父様の病氣といふので、去年の夏から一度も弾いて見る事が出来ませんでした。

『お父様の御病氣さへ快くなつたら。』

と、夕美子は床の間の琴を見る毎に、さう思つて居りました、ところが、お父様は日増しに容體が悪くなつて、とう／＼去年の暮に亡くなりました。お

お父様が亡くなつた後の夕美子の家は、まるで火の消えたも同然、かよわい母様と夕美子とでは、どうすることも出来ませんでした。それで、五七日の佛事をしまつたら、僅かばかりの道具や着物を賣り拂つて、親戚をたよりに寂しい田舎へ引き越すことに相談がさまりました。

もうこの家に住むのも、あと一週間ばかりと思ふと、夕美子は譯もなく悲しくなつて、せめては名残の慰めにとて、今日は珍らしくも琴を取り出したのでした。

『母様、田舎へ行つたら、もう琴なんぞは弾けないでせうね。』

と、夕美子は寂しい顔をあげて母に話しかけました。

『さうだねえ、弾けないこともないだらうけれど、まあ行つて様子を見た上でなければねえ。』

『私、田舎へ持つて行つたつて仕方がないから、いつそこれ賣つてしまはうかと思ふのよ。』

『賣つてしまふ？ その琴をかえ。』

と、お母様は驚いた様子をなさいました。

『えい、持つて行くのも面倒ぢやありませんか、それより賣つた方が、少しは家の足しにもなつて好いでせう。』

『そりやそうだけれど、折角お前がこれまでお稽古したのに、惜しいぢやないか。』

と言はれて夕美子は、今さらのやうに手馴れの琴と別れるのが悲しくもなるのでした。

『でも、もうお父様は亡くなつたんだし、家も田舎になるんですから、琴なんか私弾かなくつても好いわ。』

『お前が弾かなけりやア、持つて行くにも及ばないけれど、また欲しくなり

ますよ夕美さん。』

『えい、私、お琴だけは……もつと習ひたいんですけれど……』
と、言ひかけてそつと涙を拭ひ、また暫らく考へて、

『やつぱり賣りますわ母様。お琴を賣つて、いくらでもお金が出来たら、家のためになるんですもの。』

といふ心根をあはれんで、お母様の眼にも熱い涙が浮びました。

『ねえ母様、田舎へ行つてからでも、また買へるやうになつたら、買つて下さるでせうね。』

『あゝ、買つて上げますとも。田舎へ行つたからツて、落ちついてしまへば、さう困るやうなこともないだらうからね、その中にどんな幸福が向い

て来ないとも限りませんよ。』
『だから母様、私もう琴は賣ると定めて居りますの。これでも三十圓位にはなるでせうねえ。』

『もとは五十何圓かしたんだからねえ。』

『はじめてお父様に買つていたゞいた時は、私ほんとに嬉しかつたわ。』
と、夕美子はまたしても涙にむせびました。

その日、夕美子は名残の一曲に『千鳥』を奏て、母ともにもに琴の前に泣き伏しました。

一週間経つた後、夕美子の一家が田舎へ引き越す時には、その荷物の中に琴は見出されませんでした。

お 縁 側

『露子さん、何してらつしやるの。』

と、お庭の枝折戸をあけて、軽い足どりて這入つて来たのは、仲よしの敏ちやんでした。

『あら敏ちやん、まあ嬉しいこと、私、今日はきつとあなたが入らつしやると思つてゐたのよ、よく當つたわ。さあお上んなさいな。』

と、今まで机にもたれて居た露子は、にっこり笑みを浮べて、縁側に出迎へました。

『え、有りがたう。…お庭がきれいね、萩がよく咲いたぢやありませんか。』

「もう盛りが過ぎたのよ、あんなに花びらが散り布いてるでせう。ほんとに早いものね。」

「もう秋ですもの、ね、おき運動會ですわ。私、運動會が待ち遠しくつてたまらないの。」

敏ちやんは、華やかに斯う云つて、譯もなく足拍子を踏みしめながら、紅緒の草履をバタ／＼と音させました。

「敏ちやんは羨ましいのね。」

「なアぜ？」

「だつて、運動會を楽しみにしてゐられるから。」

「ぢやア露子さん、あなた運動會がお嫌ひなの。」

「嫌ひぢやアないけれど……」

「それ御覽なさい。やつぱり楽しみに、待ち遠しいでせう。」

「楽しみは楽しみだけれど、私そんな待ち遠しかあないわ。」

露子は運動會と聞くと、田舎ではじめて學校へ上つた年の運動會の日に、お母様が亡くなつたことを思ひ出して、寂しさうに俯向きました。敏ちやんは、そんなことにはお構ひなく、クルリと後を向いて、両手を縁側につき、軽く身體を浮かせるやうにしながら、

「私、待ち遠しいわ、今年も駆けっこをして、一等賞を頂かうと思つてるのよ、バスケットボールも面白いわね。」

と、無邪氣に申しました。

「敏ちゃんは、運動がお好きだから幸福ね。私なんか駄目なんですもの。』
 「駄目ぢやアないわ、なさらないからよ。』

「だつて、出来ないんですもの。』

と、露子はまた寂しさうに、縁側の板の木理を見つめました。

「出来なかつたわ、誰にだつて……今度の運動會には、思ひっきりお轉婆
 しませう、ね。私、白組なのよ、「白勝つやうに」って、ほんとに楽しみだわ。』
 敏ちゃんはまだ運動會になつたつもりで、「白勝つやうに」と、節をつけて
 言つて見ましたが、露子が黙つて俯向いて居るので、

「あら、露子さん、どうかなすつたの。』

と、心配さうに尋ねました。露子はあわてゝ顔をあげて、

「いゝえ、どうもしやしないわ。敏ちゃんがあんまり面白さうだから、感心
 して聞いて居たの。』

と、何氣なく言ひましたけれど、その眼は濕んでゐました。

「また何か考へてらしたんでせう。え？ お郷里のこと？」

「さうぢやアないの、私なんにも考へやしないわ。』

「嘘よ、さつとお郷里のことを思つてらしたのよ、さうてせう。ね露子さん、
 隠さずに教へてちようだいな。』

と、敏ちゃんも急に様子をかへて、露子の顔を覗き込みました。

さう言はれると露子は、なほさら悲しくなつて、ちつと泳へてゐた涙が、
 われ知らずハラ／＼とこぼれました。

『敏ちゃん！……私、隠してゐるんぢやアないのよ。お郷里のことなんか、思ふまい思ふまいと思つてゐるんだけど、やつぱりね、悲しいのよ、察して頂だいな。』

と、露子は堪りかねて泣き伏しました。

お母様には八ツの年に死に別れ、なつかしいお父様には九ツの年に別れて、たつた一人、遠い田舎からこの家へ来て居る露子の身の上を思ふと、さすがに無邪氣な敏ちゃんも、悲しさに胸が一ぱいになるのでした。

他にお友だちのない露子は、年下の敏ちゃんを、日ごろ妹のやうに可愛がりますし、敏ちゃんもまた露子を姉のやうに慕つて居りますので、その哀れな身の上や寂しい心もちらは、よく解つてゐるのですけれど、斯うして泣き伏

した時、何と言つて慰めてよいのか、敏ちゃんには解りませんでした。

すると露子は、敏ちゃんに泣き顔を見せまいと思つたのか、そつと涙をふいて、

『でもね敏ちゃん、私、あなたがお遊びに入らして下さるから、ほんとに嬉しいのよ。私のやうなものを慰めて下さるのは、敏ちゃんばかりよ。……級が違つても、いつまでも仲よくして頂だいな。』

『私だつて、あなたが頼りよ、心から姉様だと思つてゐるんですもの。』

『嬉しいわ敏ちゃん！ きつとね。……もうこんな悲しい話は止ませう、ね、而して何か歌ひませう。』

『え、歌ひませう。』

と、二人は涙を拭いて顔見合せました。

母なき露子は、やがて「母なき少女」といふ唱歌の一節を、清い透き通つた聲で歌ひはじめました。敏ちゃんはお庭の花のことも運動會のことも忘れて、たゞうつとりと聞き入りました。

お庭の萩が、音もなくホロ／＼と散りました。

靴

音

引きしぼつたカーテンの隙間から、紺碧に晴れた空が、鳶でも舞ひさうに和らいて見えます。

茶色に干からびた實を所々につけた棗の木は、思ひ出したやうに吹く風に揺られて、黄ばんだ小さい葉をヒラ／＼と散らして居ります。

美野子は何者かにそゝられるやうに起き上つて、ネルに重ねた裕の襟を掻き合せながら、うつとりと外の景色を見やりました。ガラス窓から流れ込む暖かい日光は、無造作に束ねた美野子の髪と、蒼白い額とを照らして、その餘りが窓際の机や白いシートの上に、キラ／＼と反射しました。

『好いお天気だこと！ 皆さんはあんなに練習していらつしやるのに、私何時になつたら起きられるんでせう。』

と、美野子はやるせない思ひに、おつと耳を傾けました。中庭を隔てた本校の彼方の運動場から、砂を蹴る靴音と、もにも、はつきりと聞えて来るピアノの響き。今しがたまで、賑やかな行進が演ぜられてゐたらしいのに、それがハタと止んで、今度はまた新しい曲がはじまりました。

『おや、ポルカセリースおやないか知ら？』

美野子は膝の上で軽く手拍子を取りながら、

『さうだ、やつぱりさうだ。ポルカは私大好きなんだのに……あゝつまらない、なぜこんな時に病氣なんぞになつたんだらう。』

待ちに待つた運動會が、いよいよ來週の火曜日と發表された今日この頃、胸の痛みで宿舎の一室に閉ぢこもつてゐる美野子は、晴れた日光を見るにつけても、ピアノの音を聞くにつけても、たまらなく佗びしい感じがするのでした。

明日になつたら、明後日になつたらと、おぼつかない望みにわれと我が身を勵まして、斯うして寄宿舎に静養してゐる間も、偷むやうに起き上つて、美野子はいつでも窓越しに校舎のけはひに耳傾けるのでした。

『もう濟んだのか知ら？ 靴音が遠くになつたやうだわ。』

と、傍の机に片肘をかけて、眩しさうにカーテンの影から覗くやうにしました。と、けだたましく鐘が鳴りひびいて、校舎の二階からは、ぞろ／＼と生

徒の教室を出る音がしはじめました。

やがて、廊下にあわたましい靴音が聞えて、それが彼方の階子段の方へ消え行きますと、今度はしとやかな足音が、美野子の室の前で止まつて、

『美野子さん、美野子さん……入つても好くつて?』

と音づれました。美野子が振り返つて、

『どなた? 好いのよ、開けて頂戴な。』

と言ひも終らぬ中に、はや扉は細目に開けられて、今運動場から駆けて來たばかりの、ほんのりと上氣した麗はしい顔が現はれました。

『あら、悦子さん! まあ嬉しい。』

と、美野子は思はず叫んで、にっこり笑顔を見せました。

『あなた起きてらつしやるの、寝てゐなくつちや悪かないの。』

と、悦子は心配さうに斯う言つて、美野子の衰へた顔と白いベッドとを見比べました。

『好いのよ、私そんなに悪かあないんですもの、寝ちやあ居られないわ。』

『だつて、無理すると悪いことよ。私ほんとに心配してるんだから、早く快くなつて頂戴いな。』

『え、有りがたう。ほんとに早く快くなりたいわ。』

と言つて、美野子は寂しさに首を垂れました。その頃の細くなつたこと、横顔のやつれたこと、悦子は見るからに痛々しさを感ぜずには居られませんした。

『お一人ぢやあ寂しいてせうね。』

『えい、もう私厭になつてしまつたの。いろんなことが考へられて仕方がないんですもの、それに此方が静かてせう、だから學校のことが手に取るやうに聞えるの。私、皆さんが楽しさうにしていらつしやるのを見たり聞いたりすると、もうくたまらなくなるのよ。』

『お察しするわ美野子さん……でも、お身體が大切だから、あんまりいろんなこと思はないで、ゆつくり御養生なさいよ、ね。』

『ほんとに病氣つてつまらないものね。』

と、今更のやうに太息を吐いて、術なげに自分の細い指を見つめてゐましたが、また思ひ返したやうに、

『悦子さん、今ポルカをしていらしたてせう。』

と、話題をかへました。悦子は、動運好きの美野子の心を知つて居りますので、斯う問ひかけられると、またも美野子に羨ましい思ひをさせるのかと、病氣の話よりも却つて返事に困る位でしたが、何氣ない顔で、

『えい、今日は練習ばかり……こゝへも聞えて？』

『よく聞えるのよ、私あれ聞くと、もうおつとして居られないやうな氣がするの。』

『ポルカは面白いわねえ。去年の運動會には、あなたと同じ組でしたけれど……。』

と、つひ悦子は言ひかけて、口をつぐみました。

『今年は駄目ね、楽しい運動會にも出られないんですもの、胸さへ痛まなけりやア、私無理にでも先生にお願いするんだけど……。』
『でも無理すると悪いことよ、運動會は來年もあるぢやありませんか、ねえ美野子さん、ほんとにそんなこと思はないで、お大切になさいよ、ね。』
と、悦子は慰めがてに、傍らの藥瓶に目を注ぎました。外では何が起つたのか、一しきり生徒の騒ぐ音が聞えて、やがてまた次の時間の鐘が鳴りひびきました。

『あら、もう時間よ、ぢやあ美野子さん、私失禮することよ、またお晝に來ますわ。』

軽く挨拶して、あわたしげに出て行く悦子の後姿を、美野子は感謝と美

ましさうな眼で見送りしました。而してその足音が、かすかに幽かに聞えなくなつた時、美野子はホロリと頬を傳ふ涙を拭きもせず、そのまゝベッドの上うへに倒れるやうに横たはりました。

天長節

『今日のよき日は大君の、』

うまれ給ひしよき日なり……』

と、お隣に寝てゐた秋二兄さんが、大きな聲で歌ひだしたので、桃子ちゃんはバツチリと圓い眼をあけました。

『桃子ちゃんの寐坊や、今日は天長節だよ、早く起きないと、學校がおそくなるぞ。』

蒲團を足でヒヨイとはね飛ばしながら、秋二兄さんは大元氣で、一番さきに起き上りました。すると、

『もう何時だい？ 遅くなつたか知ら。』
と、大きい兄さんの春雄さんも眼をさまして、いそがしさうに飛び起きました。

『あら、私もおそくなつたわ。』

と、桃子ちゃんは心配さうに、あわて、顔を洗ひに行きました。

それから桃子ちゃんは、京都のお土産に伯母様から頂いた餘所ゆきの赤襦子の幅のひろいリボンを、頭の上に大きく結んでもらひました。

『桃子ちゃん、今日はお祝ひ日だから、この間こしらへた友禪を着せてあげますよ。』

と、お母様が袴にそろへて、綺麗な菊模様きくもやうの三枚襲まいかさねを出してくださいまし

た。兄さんたちは、自分でさつさと洋服に着かへて、いつもの通り『お早う
ございます』と言ひに、隠居所の方へ行きました。

桃子ちゃんは、平素着の元祿袖の短かいのは違つて、今日は袴の裾と同じ位な長い袂を大切さうに抱へて、二ツかさねた白襟の間から、可愛らしい顔をにこ／＼させながら、隠居所へ参りました。

『おぢい様、お早うございます。おばあ様、お早うございます。』
ちやんと両手をついて、いつもより丁寧に御挨拶をしました。

『おゝ、お早う。お支度が出来たね、どれ／＼立つてお見せ、まあ綺麗になつたこと、大變よく似合つたよ桃子ちゃん。』
と、おばあ様は前に廻つたり、後から眺めたりして、おほめになりました。

おぢい様も禿げた頭をツルリと撫てながら、

『おゝ立派々々、これぢやア今日は悪戯も出来まいのう。』
と、笑つていらつしやいました。

桃子ちゃんは斯う褒められますので、何だかちつとしては居られないほど嬉しくて、自分も折目たゞしい袴の襷を直して見たり、大きなリボンにそつと手をやつて見たりして、にこ／＼して居りました。

やがて家中で一緒に御飯をたべる時も、桃子ちゃんはあまりの嬉しさに、お腹の中が躍つてゐるやうな氣がして、いつもほど喰べられませんでした。すると、お給仕をしてゐた女中の梅やが、

『おや、お嬢様、今朝はどうして召しあがらないんでございます。』

と、不審議さうな顔をして申しました。

『今日は氣取つてゐるんだもの、ねえ桃子ちゃん。』

と、傍にならんでゐた大兄さんが、からかふやうに言ひましたけれど、桃子ちゃんは澄まして、さつさとお仕まひにしました。

『桃子さん！』

『桃子さん、いらつしやいな。』

お玄關の方に優しい靴音がしたと思ふと、菊子さんと伊代子さんが、誘ひに来て下さつたのでした。

『あら、菊子さん、伊代子さん、早いのねえ。私、今すぐ行きませうよ。』と、大きな聲で言つて、すぐお玄關に駆け出して行きました。

今日は菊子さんも伊代子さんも、同じやうな大きなリボンをかけて、長い袖の美しい着物で立つて居りました。

『早くいらつしやいな、もう皆さん行つてらつしやることよ。』

『ええ、今日は書物なんか持つて行かなくつても好いのねえ、私すぐ行くわ、待つてちようだいよ。』

また奥の方へバタ／＼と駆けて行つて、おばあ様やお母様に『行つて参ります』と、挨拶もそこ／＼に、落ちつかぬ心もちで出て來ました。お玄關にちやんと揃へられた赤い天絨鶯の空氣草履をはいて、桃子ちゃんはにつこりしながら、

『さあ行きませう。』

と、菊子さんや伊代子さんと肩をならべました。御門を出る時、桃子ちゃんが一寸後を振りむきますと、おばあ様やお母様も喜ばしさに、笑顔で見送つていらつしやいました。

街を行くと、軒毎に掲げられた日の御旗は、冷たい朝風にヒラ／＼となびいて、金モールの洋服に白い鳥毛の帽子を被つた人たちを載せた馬車や俥が、幾臺となく走つて行きます。女学校の大きい姉様たちや、桃子ちゃんと同じ年位な生徒も、今日は殊さら楽しさうな笑顔を見せて、思ひ／＼のリボンを朝風にひるがへしながら、華やかに袴の裾を蹴つて行きます。そのいかめしくて美しい姿と、のどかな有様とが、おのづから天長の佳節を祝つてゐるやうに見えました。

今日のよき日の学校の講堂は、愛らしい少女たちのリボンによつて、さぞ美しく飾られることとせう。

『めぐみあまねき君が代を』

祝へもろびともろともには………』

桃子ちゃんたち三人は、いき／＼した顔をならべて学校の門をくゞつてから、どんなに清らかな聲でお祝ひの歌を歌ふこととせう。

月の玉

お庭の真中にある蓮池は、大きな葉が澤山になつて、朝と晩にはきれいな露の玉が轉がつてゐます。

朝寝坊だつた久美ちゃんも、蓮の花の蕾が一日一日と脹らんでゆくのを見ようと思つて、朝早く起きるやうになりました。眼がさめてから、いつもの床の中でバッチリと大きな眼を開けて、天井板と睨みつこをしてゐると、お母さんが入らしつて、

『おや、久美ちゃんは眼がさめかえり？ さア、早く起きて御飯をたべるんですよ。』

と仰つしやつて、着物を着變へさせて下さるまで、床の中に居るのですけれど、この頃では眼がさめると、どうしても早く蓮を見にゆきたくて仕方がないものですから、さつさと一人で起きてしまひます。

『久美ちゃん、一人で起きたの、早いことねえ。』

と、お母様が賞めて下さいます。お顔を洗ひに行く前に、一しさりお池の廻りを廻つて、涼しさにキラキラした露の宿つた蓮の葉と、ふくらんだつぼみとを見てまゐります。久美ちゃんが一つどうしても不思議に思ふことは、昨日の夕方、何處かへ行らしつたお太陽様が、いつの間に歸つていらつしやるのか、いくら早く起きても、きつとにこ／＼して、蓮の葉の露と一所にいらつしやることです。

『おやく、今朝ももういらしたよ。』
と、見てゐますと、東の方からキラ／＼と光つて、
『久美ちゃんお早う！』
と、仰つしやつていらつしやいます。

お太陽様はどこへいつてお寝みになるんだらう？ と、久美ちゃんは一度見つけたくて仕方がありませんけれど、毎朝負けてしまふものですから、いまだにわからないのです。

夕方になると、向ふのお山の方へお太陽様がいつておしまひになります。そのかはり裏の柿の木の間から、お月様が生れていらつしやるのです。

お湯に這入つて、さつぱりとした糊の着いた着物に着かへて、お父様やお

母様と一所に御飯をすませてから、またお庭に出て見ますと、

『久美ちゃん、今晚は！』

と、まんまるいお月様が、いくつも蓮の葉の上にいらして、風の子にゆられて面白さうに、ころ／＼と轉がつて御運動をしていらつしやるのです。

久美ちゃんは羨やましくて仕方がありません、いつかお月様がお留守の間にソット行つて、あの大きな葉の真中に坐つて、ころ／＼ところがつて遊んだら面白からうと、思つて見てゐるのでした。

久美ちゃんはお友だちもないし、お悪戯をするとお母さまから、『おいたをしてお手が汚れると、洗つて上げませんよ。きたない手をしてゐると、お鼠にかぢられますから、よごしてはいけません。』

と、お湯から出た時に叱られるので、見つけられると大變だから、つまらな
いけれど、たゞ見てゐるばかりです。

『お月さまいくつ十三七つ』

まだ年わかいな………』

と、お祖母さまがお教へ下すつた歌を、大きな聲で歌ひます。さうすると、
お月様はなほく嬉しさに、キラ／＼光りながら、

『久美ちゃん、ありがたう！ 久美ちゃんありがたう。』

と、仰つしやるやうに見えます。

斯うして、久美ちゃんはお日様やお月様とお友だちになつて、毎日々々歌
をうたつて上げましたが、ある晩、いつもの通りお池に行つて見ましたら、

お月様はお留守で、たゞ露の玉ばかりがお留守番をしてゐました。

『何處へいらしたんだらう？』

と、露にきいて見ましたら、

『今夜は雲さんが出ましたから、お月様はお留守ですよ。』

と言ひました。

久美ちゃんはずまらないから、ぼんやり立つてゐました。すると、眞中の
蓮の葉が、何か歌ひ出しました。

『雨ふれ／＼、ぎやアぎやア／＼。』

と、いつてゐます。

妙なことをいふ葉だと思つてゐると、方方で同じやうに歌ひ出しましたか

ら、傍へよつてよく見ると、蓮の葉の上に小さな青蛙が両手をついて、大威張りに歌つてゐるのでした。

『いやな蛙だよ、お月様がお留守だもんで、あんな所に坐つて雨ふれなんて、小さな癖にあんな大きな聲を出して。』

と、怒つてにらんでやりましたけれど、やつぱり平氣な顔で歌つてゐるので、久美ちゃんは口惜しくて堪りません。どうかしてやめさせやうと思つても、なか／＼よしませないので、久美ちゃんも負けないやうに、一つ大きな聲で歌つてやらうと、

『お月さまいくつ』だの、『お月様えらいな』を一生懸命に歌ひました。蛙の方はだん／＼大勢よつて、『ぎやア／＼雨ふれ』と勢よく歌ひ出しました。久

美ちゃんは今もう喉が痛くなつて、泣きだしさうになりました。

どうして今夜はお月様がいらつしやらないのかと、早く出て来て下さるやうに、我慢して待つてゐましたが、もうとても痛くて歌へなくなつて、涙の方が先にホロ／＼と出て來ます。蛙はますます歌つて居ますので、とう／＼久美ちゃんは泣き出してしまひました。

そこへ雲の間から、いつものやうなにく／＼したお月様が、ヒョッコリお顔をお出しになつて、久美ちゃんの涙の玉の上にとまつて、

『久美ちゃん！ 御褒美。』

と、お月様のやうに光つたきれいな玉を下さいました。さうすると、今まで騒々しく歌つてゐた蛙は、皆、ピヨコン／＼とお池の中へ飛びこんでしまひ